

俺が宇宙で最強だ！

クウラLove略してくうらぶ！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クウラがフリーザを倒したサイヤ人を見に行くようです

目次

フリーザの兄貴!?!クウラ地球に襲来!	1
激突!超サイヤ人VS最強の一族!	5
限界を超えろ!超サイヤ人の新たな可能性!	10
超サイヤ人の先の先!悟空新たなステージへ	14
セルゲームに迫る宇宙からの刺客!南の銀河の暴れ者!	17
セルゲームの終幕!かめはめ波対かめはめ波!	22
サイヤ人の王子	29
強さとは何か	34
新ナメツク星にて	37
メタルクウラ(が)総力戦	41
決着!ビツクゲテスター戦!そして...	45
クウラの屈辱、幻見せる森の中	49
地球戦士の試合、クリリンVSピッコロ	53
ライバル衝突!見せる怒涛の狼牙風風拳!	57
新たなサイヤ人、ブロリーとパラガスでございます	60
真夜中の襲来、超サイヤ人ブロリー	63
混血サイヤの魔閃光!余裕の伝説!	67
銀色の戦士と進化し続けるバケモノ	71
黄金の戦士ゴジータ爆誕!熱戦・烈戦・超激戦!	74
クウラ発つ!おいでませペンギン村!	78
アラレの秘密を暴け	81

フリーザの兄貴!?クウラ地球に襲来!

「何?フリーザが...?」

側近であるサウザーから、フリーザが敗れたと知らせが入った。サイボーグとなって甦ったかと思つて直ぐ死んだとなれば驚きも少ないもの。

脅威となる存在だと見抜いてサイヤ人共を滅ぼしたのは良かったが、それをまたサイヤ人にしてやられるとは。

フリーザもまだまだ甘い。

父コルドもやられたそうだが、まあそれはそうだろうと言う感想しかない。

歳も取つていて運動不足もあれば、強さにもサビがつくに決まつている。馬鹿な父親と弟を持つと苦勞するな...

「サウザー、地球とやらに向かうぞ」

「はっ!」

フリーザをも倒すサイヤ人:つまるところ超サイヤ人か。

ふふふ、これは楽しみになってきたな。

「や、ヤムチャさんの気が急激に下がって!」

「クソ、やられたか!急ぐぞ!」

地球はまた新たな敵が現れていた、人造人間である。

未来からやってきた青年トランクスから伝えられた敵を倒す為に探していたのだが、たった今現れ1人のZ戦士が倒されてしまった。

そして超サイヤ人となった悟空は19号と戦うも、心臓病が発症しダウン寸前。

そこにやってきた超サイヤ人となったベジータは19号を呆気なく爆散、ドクターゲロもとい20号は逃げ出してしまった。

暫くしてドクターゲロは18号17号を起動、17号は起きて早々ゲロを破壊し16号も現れた。

悟空がいない今、ベジータらで立ち向かうも結果は惨敗。人造人間の気紛れによって命は免れた。

そしてまた新たな人造人間セルが現れ、ピッコロを太陽拳で撒いた後のこと。

地球に新たな存在が降り立ったのである。

「こ、この気感じは…！クリリンさん！」

「ああ、フリーザにそっくりだ。こんな時に限って！」

「人造人間にフリーザの関係者か、ふざけやがって」

「ベジータ達も精神と時の部屋で修行してるし、俺達が何とかするしかないみたいだな」

「はい…！」

「…油断するな、相手がまだここから強くならないとは限らんからな」
「おう！」

「ここが地球か」

「はい、クウラ様」

「環境のいい星だ、確かにここにサイヤ人はいるんだな？」

「そう思われます。クウラ様、この後の予定は」

「まずは現地調査をサウザーとドレーで行え、あまり目立つなよ。この地球の文明を簡単にまとめておけ、期限は5日だ」

「わかりました」

「了解です」

「そしてネイズは環境調査だ、自然や水質を調べておけ。期限は5日だ、わかっているとは思うが」

「はい、出来るだけ傷つけずにですよね！」

「その通り、俺は強いエネルギーが集まっている所に向かう。では解散だ」

機甲戦隊が散り散りになって飛び立っていった。

先程言ったようにオレも出る事になるが…客が来たようだ。

「何者だ貴様ら」

「お前こそ！フリーザの関係者か！」

「ほう、成程。ではサイヤ人の仲間か」

ナメック星人に、恐らく地球人。そして…何処と無くあのサイヤ人の顔つきに似ているガキ。

戦闘力はまあそこそこと言ったところか。

「オレの名はクウラ、愚弟が世話になった様だな」

「フリーザの兄貴だつて!？」

「フン、敵討ちと言ったところか」

「敵討ちだと？くだらん、何故オレがそんな真似をしなければならん」
「えっ？じゃあ何しに来たんだ？」

「あの愚弟を倒したサイヤ人を見に来たんだ、案内しろ」

「だ、誰がお父さんのところに案内するもんか！」

「お父さん…？そうか、貴様はあのサイヤ人…孫悟空の子供か」

「悟飯！下がっている！」

「そう慌てるな、オレは騒ぎを起こすつもりはない。環境が破壊されてしまうからな」

「…？」

どうにもオレが暴れると思われているな。

まあフリーザの所業を知るのならば当然か、ならば…

「おい、孫悟空の息子」

「な、なんだ！」

「地球の食事は美味いか」

「…へ？」

「美味しいのか聞いている」

「お、美味しいと思うけど……」

ふむ、そうか。美味しいのならそいつを味わってからでも遅くはないか…

金は何処かで換金するのでしょうか。

「どうやら貴様達は別の存在とやらと揉めていると見た、違うか？」

「だからなんだ、まさか共闘するなんて言うわけでもあるまい」

「それはここに住んでいる貴様らの役目だろう、オレが知ったことで

はない。そのゴタゴタが済むまでオレは観光に勤しむとする」

「観光!?!」

「何かおかしい事を言ったか」

「い、いやそんな事は…でもどうみたって侵略しに来たって顔してるし…」

「では聞くが、行ったことがない都市に行った時貴様は何をする?」

「そりやあ色んな所を見に行くけど…」

「そうだろう、ならばオレがしても問題ないだろう」

「あの…ピッコロさん」

「…なんだ」

「もしかしてクウラはそんな悪い奴ではないんじゃない?」

「…:…:警戒だけは解くなよ」

「話は済んだか?ならばオレは適当にぶらついている、用があるのなら来るといい」

「い、行つちまった…」

「…とりあえずはセルの方からだ、クウラの事は一先ず後回しだ」

「いいのかよピッコロ、野放しにしておいて」

「なら人造人間と奴を同時に相手できるのか?」

「まあ…それもそうだな」

「クウラが呑気に観光しているのであれば、人造人間に専念せねばなるまい」

3人の戦士はクウラの向かっていった先を眺めながら、立ち尽くしていた。

「何?換金できないだど?」

「す、すみません…:どうもこれは取り扱える程の代物ではなく…」

「ちっ!ならこれを砕く、それならば数個は換金出来るだろう?」

「は、はい。それならば…合計で「ゼニー」となります」

「よかろう、さっさと用意しろ」

「ただいまあ!」

激突！超サイヤ人VS最強の一族！

「ふむ、どの星よりも美味しいな」

今まで様々な星を侵略がてら色々な物を食してきたが、ここまでレベルが高いとは…

これは科学や技術よりも、食文化が重要になってくるか。

「クウラ様」

「サウザーか…その格好はなんだ？」

「これはアロハシャツというもので、現地民と馴染む為に購入致しました」

「ふむ、流行っているのか」

「さあ…私からはまだ何とも。クウラ様の分も揃えています。着替えますか？」

「……貸せ」

サウザーからアロハシャツとジーパンなるものを受け取り、さっと着替える。

よくよく周りを見れば確かに皆衣類を身にまとっていた、もしや浮いていたか？

「お似合いです、クウラ様」

「そうか」

「そういえばサイヤ人にはもう？」

「いや、お前も確認しているだろうがオレ達以外の客がいるらしい。確かめようにも奴らがそれを片付けねばともに戦う事もできません」

「確かに。いくつかの都市で何者かに人が消された跡を確認しておりますね、対処しますか？」

「構わん、奴らにやらせておけ。無論遭遇したのなら話は別だ」

「はっ。まずは観察し状況次第によって逃走を測ります」

「それでいい」

自身を強者だと盲信し、相手に挑むのは愚の骨頂。

コルドとフリーザがいい例となる。

ギニュー特戦隊も、ギニュー以外はその節もある。

機甲戦隊にはその教育も施し、敵からすれば厄介な存在になるだろう。

ドーレとネイズは酷かった、能力は有能ではあるが有能であるが故に油断も多い。

まあ、今はオレの右腕になりえる部下になったのだからこれ以上は言うまい。

「スカウターは常にオレにセットしておけ、オレが戦闘となった際は直ぐに向かう様にとドーレ達にも伝達しておけよ」

「了解致しました、クウラ様」

「ではいけ」

「お待ちを、クウラ様」

「なんだ」

「地球のカレーは大変美味でしたので、是非ご賞味ください」

「……………覚えておこう」

思えば食文化に興味を持たせたのはサウザーだったな。

フハハ、数々の香辛料片手に熱演していた姿は面白かった。

「ふっふっふ、感謝するぞベジータ。貴様のおかげで私は完全体となった」

「フン」

「ではウォーミングアップに付き合ってくれるかな?」

「そのウォーミングアップでお終いにしておるぜ」

ベジータが完全体になるのを助力し、セルと再び対峙した時である。

別次元からの観測者達はクウラの様子を見ていた。

「時の界王神様、あのクウラは一体……」

「ふつーに観光楽しんでるわよね、アロハシャツまで着てるし」

「はい……ここにいるクウラと似ても似つきません。歴史改変でしょうか、人造人間の時代にクウラが地球に来ること自体も変わってます」

「うーん、でも今の所接敵もしてないし…様子見って所かしら。けど何時でも行ける準備はしておいてね」

「わかりました」

「それにしても…」

「なんです?」

「クウラがアロハシャツ着ながらソフトクリームペろペろしてるの、可愛くない?」

「ぶふっ」

セルゲームとやらが開催されるらしい。

参加者は自由、となれば見に行けば孫悟空の闘いを拝めるな。

開催時刻は10日後か、ならば身体を動かす時間はあるか…

「よう」

「貴様は…孫悟空だな?」

「ああ、おめえはクウラだな。オラに用事があるんだろう?」

「そうだ。我が愚弟を倒した超サイヤ人の実力、このクウラに見せてもらおう」

「オラを殺しに来たんじゃねえみてえだな」

「無論、このオレに無様な姿を晒すのであれば殺すがな」

「おめえ…」

孫悟空が神妙な顔でこちらをみてる。

何だ?

「ソフトクリームが溶けてっぞ」

「!」

いかん!限定のソフトクリームが!

急いで食し再び向き直る。

「待たせたな」

「なんちゅーか、締まらねえなおめえ。そんなに悪いやつじゃなさそうだ」

「貴様らからすれば悪だろう、オレも星を侵略し我が物としてきたのだからな」

「おめえも多くの人々を殺してきたって訳か」

「殺して何になる」

「？」

「殺してしまえば労働力も減り、圧政を行えば反逆を招く事になる。結果的にオレの不利益となる」

「圧政ってなんだ？」

「…こいつさてはアホなのか??」

まあ猿の分際で頭がいいのはサイヤ人の王子くらいか。

圧政の意味を態々教え、構えを取る。

「ここじゃ周りに被害が出ちまう、場所を移すぞ」

「好きにしろ」

「トランクス、彼を呼んでちょうだい。悟空君とクウラが戦い始めるわ」

「わかりました！」

「…ミラとトワが間違はなく絡んでくるわ、とんでもない事にならないければいいんだけど」

時間じくしてミラとトワがクウラと孫悟空の近くに現れた。

「ふふふ、なんだかよく分からないけれど利用できそうね」

「あのフリーザの兄か、強いのか」

「そうねえ、他の時代のクウラより何倍も強いわ。相当のキリが集まるわね」

「仕掛けるか？」

「ええ、パワーアップさせてしましましょう」

「さあて、気合い入れねえとな」

「楽しみだ、始めから全力を出せよ？でなければ死ぬだけだ」

「ああわかってるさ」

その瞬間、ナニかがオレの中にはいつて来るのを感じた。

邪悪なエネルギーが充満する。

これは…オレの思考を奪おうというのか！

「ぐっ!?ぐおおお!?」

「お、おい!でえじょうぶか!」

「ふふふふ、さあ私の手に落ちなさいクウラ」

「おめえ!なにもんだ!」

ふざけるな…!このオレを操ろうなどと…

オレは操り人形にはならんぞ!

「ぬおあああああ!!!」

「なっ!?まさかそんな…!逃げるわよミラ!」

「…チツ!」

「はアアアアア!!」

闇に染るエネルギーは霧散した。

周りを見れば曲者は既に消え失せたらしい、手を下せないのは残念だ。

だがこれで邪魔する者はいなくなり、心置き無く超サイヤ人と戦うことが出来るな。

「ふう…もう大丈夫だ、始めるぞ孫悟空!」

「…ああ、行くぞ!」

限界を超えるろ！超サイヤ人の新たな可能性！

「はああああ…！はあ！」

「ほう、その変わりように黄金の輝き…超サイヤ人か」

「そうだ」

成程、超サイヤ人とはこれ程までの実力があるとは。

これではフリーザでは勝てまい、サイボーグと化した所でたかが知れている。

だがオレは弟とは違う！決して油断も慢心もしない、考えるのは勝利だけだ。

「愚弟はこの姿が最終形態だった、だがオレはあと一回変身ができる」「何？」

「見せてやろう、このクウラの力を！かあ！！！！」

「す、すげえ気だ…こりや全力出さねえとやべえかもな」

「さあ、始めようか！」

「へへ…よしこい！」

クウラと悟空の姿が消えたかと思えば四方八方から衝撃音が鳴り響き、その余波が周りの大地を削る。

遂に始まったらしい。

『君…そっちは大丈夫!?!』

『はい、何とかなってますが…どうにかなるのかなこれ』

『危なくなったらトランクスのパートナーにも来てもらおうからね!』

『だりやりやりやりやりや！うわりやあ!!』

「はあああああ！」

クウラの肘打ちが悟空の腹に入る直前、悟空は足で受け止めてカウンターの回し蹴り。

それもクウラは片腕で弾き、回転しながら尻尾で悟空の頭を撃つた。

だが、それも悟空は自ら前回りする事により軽減して逆に蹴りをお見舞しクウラは下に落ちていった。

クウラは持ち直すと極太のエネルギー波を放つとそのまま追従、悟空がエネルギー波を防いだ直後クウラに不意を突かれ頭突きを食らってしまう。

怯んだ隙を見逃さず、クウラは追撃のスレッジハンマーを繰り出す。悟空はこれを瞬間移動で回避。

背後に回った悟空は殴り飛ばそうとするも、振り向かないままクウラは裏拳を見舞う。

距離をとった悟空に一瞬で近づき腹に一発入れ、そのまま岩山に突っ込み地面に叩き伏せた。

「ごはあああー！」

「どうしたサイヤ人！その程度ではなからう！」

「ぐっ、やるなおめえ…オレだつてこっからだ！はああああ…！界王拳！」

超サイヤ人と界王拳の合わせ技でクウラの押さえつけから脱出、驚いたクウラの頬を殴り抜けた。

界王拳のブーストを掛けたまま背中、腹や顔面などにラッシュを叩き込み最後にかめはめ波も放った。

そのままかめはめ波を食らうかと思われたが、クウラが持ち直しかめはめ波を受け止めきった。

「はあ…はあ…その界王拳とやら、中々厄介な技だな」

「へへ、フリーザに続いておめえにまでかめはめ波を受け止められちまうとはな…」

「ククク、ここまで粘ってくるとは思わなかったぞ孫悟空！だがその界王拳とやらも長くは続くまい」

「そいつは…どうかな？」

再び両者は衝突し、衝撃音が鳴り響く。

お互い殴る蹴るの応酬、だが拮抗していたが終わりが近づいてきた。

「はっ…はっ…」

「ふう…ふはは、やはりその様子では持たなかった様だな」

「へへ、だがオラはまだやれるぞ。だけんどそろそろ終わりにしよう

ぜ」

「……そうだな、貴様との戦いはまだ終わらせたくはないが。この技を持って終わりにしよう」

クウラが空に手を掲げると、巨大なエネルギーの塊が姿を現した。マグマを思わせる禍々しい紅い塊は更に巨大化する、悟空はそれを見据えて構えを取る。

「か……め……は……め……波あああああ!!!」

「キエアアアアア!!」

互いの最大火力の技が衝突した。

クウラは押し切らんと力を更に込め、エネルギーを送り続けた。

悟空も負けじと踏ん張り、身体中からスパークが現れた。

やがて競り合う力に耐えきれなくなった互いの技は消滅し、クウラと悟空は最後の一撃とばかりに突撃し……

「そこまでです、クウラ様。それとサイヤ人」

間に割って入ったサウザーが止めた。

「おいサウザー、邪魔をするな」

「手合わせでお互いが瀕死になるなど、それは最早決闘です。一旦仕切り直しを」

「はは、悪いなあ……オラも本気になっちゃった」

「ふん、それで孫悟空。最後何か変わったな？」

「おめえのお陰で超サイヤ人のその先を感じられた。ありがとなー！」

「礼など必要ない、今度戦う時まで物にして置くことだ」

「ああ、そうすつさ」

クウラと悟空は元の状態に戻り、一息ついた所で悟空は疑問に思っていた事をサウザーに尋ねた。

自分とクウラの一撃を受け止められて、ピンピンしている事を。

「ピンピンだと？バカか、超サイヤ人の貴様とクウラ様の一撃を止めておいて無事でいられるか！全神経を集中し、ほぼエネルギーを使い切って漸くだ！」

「え？じゃあなんでおめえそんなふうに立っていられんだ？」

「クウラ様を前に無様に地に這い蹲れるか！ぶっ飛ばすぞたわけ！」
サウザーは激怒した、かのサルをぶっ飛ばさんと。

そう怒鳴りながらもしつかりとクウラの身支度を整え紅茶まで用意する、その周到さに感心しながらもクウラは（サウザーを怒らせては面倒だ）と再認識したのだった。

超サイヤ人の先の先！悟空新たなステージへ

精神と時の部屋にて、悟空と悟飯はそこにいた。

「そういえばクウラとの闘いはどうだったんですかお父さん」

「ああ、そりやすげえ事になってたぞ。クウラのお陰でオラも超サイヤ人の先が見えたかな」

「え、超サイヤ人の先？」

「超サイヤ人の先は元々何となくイメージはあった、ベジータも同じだった筈だ。だけど、正しくは先の先だな」

「どういう事なんですか？」

「ま、それよりまずは悟飯。超サイヤ人の状態が普通になる様にならねえとな」

「はいー」

悟飯は少し離れ、超サイヤ人のまま落ち着きを取り戻す為に瞑想を始めた。

それを見届けた悟空は、クウラとの闘いを思い出しつつ力を込めた。

「…………あの時オラの中に芽生えた力、偶然じゃねえ。超サイヤ人を超えた超サイヤ人、超サイヤ人2になるには超サイヤ人になる要領じゃなかった」

穏やかな気を怒りで爆発させ、覚醒した超サイヤ人。

ならばその超サイヤ人を通常状態の様にした後、更に怒りとは別の切っ掛けがある。

「悟飯の場合はこれも怒りなんだろうけどな」

悟飯は怒りによって更なる力を引き出す、然し己の場合は少し違う。

クウラとの闘いはワクワクはあったものの、怒りなどはなかった。だがその中での状態になったのは一体何か。

「思い出せ、あの時の闘いを」

そう、あったのはただただ闘いを楽しんだ事実。

サイヤ人を動かすのは闘争心、それしかない結論に至った。

穏やかな心、そして闘争心。

怒りではなく闘争の為に、ただ熾烈な闘いをする為だけに進化させる。

燃え上がらせろ、闘争心を。

「はあああああああ!!」

バチ：バチバチツ!

悟空を纏うオーラがスパークを纏い始めた。

髪が更に逆立ち、気がどんどん膨れ上がるのを悟空は感じていた。

そして…

「うおりやあああああ!!」

超サイヤ人2、覚醒。

悟飯は悟空の変化に驚き、駆け寄った。

「す、凄いよお父さん!これならきつとセルにも勝てるよ!」

「…かもな、だけどそう楽観は出来ねえ。相手はまだいるからな」

「クウラですね?」

「ああ、クウラもオラと一緒に何か掴んでる筈だ。もつと強くならねえとな、その為にも悟飯も頑張ってもらわねえとな」

「はい!でも…」

「お?」

「セルが通過点みたいで何だか可哀想ですね」

「ははは、まあ仕方ねえさ。多分クウラの方が強えからな」

会話もそこそこに、お互いの修行に戻るのであった。

「釣り堀ってのは中々いい、どハマりしちゃったぜ。へへへ」

「おつ、わかってるねえ緑色の兄ちゃんよ!」

「おお!教えてくれたおかげだぜおつちゃん!」

緑色の肌の長髪男、つまりドレーな訳だが。

ある程度任務を終わらせたので、散策していた所釣り堀経営しているおつちゃんに声をかけられた。

文明を理解する、という名目で来ているのでこれはサボりではない。

「おつとと、そらヒットだヒット！」

「来たな？そらっ！」

パヒュン…ピチピチピチ…

鯉と呼ばれる割と大きい魚を1発で仕留めた。

「おおお！やるじゃねえか兄ちゃん！ここの又シだぜ！」

「コイツか、はははやったぜ！」

「釣るのは難しくくて中々釣れねえのになあ…」

「俺アこう見えてそこそこ繊細な動作が出来るんだな」

「へえくそうなのか、見た目じゃあわからねえもんだ」

「俺の上司がよ、ガサツな俺を徹底的に指導してくれたお陰だ。死ぬ程苦労したんだぜ？」

「死ぬ程ってまさかまさか」

おつちゃんは何談と捉えたが、実情は机と椅子に縛られ手作業を延々とされた挙句その後クウラとのトレーニングなので死ぬ程とは言い過ぎでもなんでもないのであった。

「でもよ兄ちゃん、そんな厳しい上司なのにここで遊んでていいのかい？」

「構わねえさ、仕事を期限内に持ち込めばこうしてても問題ないんだ。出来なかつたら…殺されちまうけどな！」

「だっはっは！そらおっかねえなあ！」

ドーレが釣った魚の数、1時間で6匹ッ！

後日ドーレがクウラに船内に釣り堀をと進言したが、臭いが漂ってくるのは困るとの事で却下された。

セルゲームに迫る宇宙からの刺客！南の銀河の暴れ者！

「さて、セルゲーム開催だ。先ずは誰からだ？」

「オラからやらせてもらう」

「いきなり貴様からか孫悟空、お楽しみは最後まで取っておきたかったのだがね」

セルゲームが開催され、Z戦士は現地に赴いた。

戦う相手に悟空が名乗りあげ、セルと対峙するがここで予期せぬ侵入者が現れてしまった。

「俺達も混ぜて貰おうか」

「…？飛び入り参加者かな？」

『悟空よ聞こえるか！』

『界王様!?!』

『そいつはボージャックとその部下達じゃ、元々はワシら界王達の手によって銀河の隅に封印された乱暴者じゃ!』

『なんで封印された奴が地球に!』

『南の界王が何故か死んでしまって封印が解けてしまったんじゃ、兎も角そやつらは只者ではない!気をつけるんじゃ悟空!』

『我々ボージャック一味はこれより、この素晴らしき環境の地球を支配下に置くのです』

『何?』

『地球の支配なぞ元より興味はないが…邪魔をしないでもらいたいな』

セルが気を取り直し悟空と対峙し、悟空も答えるように構えをとった。

ボージャックの前にはベジータが、配下の4人には悟飯達が立ち塞がった。

「貴様の相手はこの俺様だ」

「ふん、相手になるとは思えんがな？」

「後悔するなよ！」

ベジータとボージャックは戦いの場所を移し、悟飯とトランクスそして天津飯ヤムチャは謎の系攻撃によって苦戦していた。

「おぐっ……！」

「がはっ！」

天津飯とヤムチャはゴクアのボディীবローによりリタイア、未だに抜け出せないでいた2人は無理矢理超サイヤ人になる事により脱出出来た。

しかし依然として気の糸が厄介である事には変わりなく、それでいて動ける者が攻撃してくるので防戦一方であった。

その様子を遠くから見ていたクウラ見かねて機甲戦隊に言い放った。

「……手を貸すつもりはなかったが、しかたあるまい。クウラ機甲戦隊！これより孫悟空陣営の手助けをしろ、但しアシスト程度だ」

「二はっ！クウラ機甲戦隊出動致します！」

「全く、これから面白い戦いが見れると言う時に水を差してくれるな。ボージャックめ」

「…さて、私達は私達の戦いを始めるぞ孫悟空。これ以上待つ理由もないだろう、ベジータ達が向こうにやっているのだからな」

「ああ」

両者が追突し、戦いが始まった。

その少し離れた所で、ベジータは目の前の強敵に苦戦していたのであった。

「チィ！」

「ふっはっはっは！」

「クソツタレ、全く堪えてやがらねえとはな」

「ふっ、サイヤ人の王子とやらはこの程度なのか？」

「ふざけるな、まだまだこれからだ！」

ベジータが超ベジータへとなり、ボージャックに気弾の雨を降らせ

ボージャックにガードをさせる。

その隙に背後に周り、後頭部へ蹴りを入れるもすんでのところ足を掴まれ地面に叩きつけられた。

放り投げられたベジータにエネルギー波が迫り、直撃する瞬間横からエネルギー波が飛んできて逸らされたのだった。

「父さん！」

「トランクス、邪魔をするな！」

「1人では無理です、2人でなら戦えますよ！」

「安心しろ、2人同時にあの世に送ってやるぜ」

ボージャックが2人にリアアットして吹っ飛ばす、それを受け身で流したベジータとトランクス。

孫悟空が天性の戦術の天才であるなら、ベジータは天性の戦闘の天才だ。冷静になりさえすれば勝ち筋を見いだせる、それがベジータなのである。

「…トランクス！俺の息子ならばわかってるな！」

「…はいっ！」

「ハアアアアア！」

2人はボージャックの胸元に向けて同時に拳を放ち、ボージャックのガードを引き剥がす。

ボージャックもまた豪腕を振るうも、ベジータはそれをわざと受け自ら回転することによりダメージを最小限に抑えて回転蹴りをカウンターとして見舞う。

トランクスはそれに合わせて反対から回転蹴りしてボージャックの頭に炸裂した。

「がっ…い調子になるな！」

ボージャックはすぐ立て直し、トランクスに気弾を放つ。

トランクスはベジータに目配せし、それをベジータの方に弾いた。ベジータはそれをまたボージャックに向けて弾き返し、ボージャックがそれを避けた時に2人はまた腹に蹴りを入れた。

この3人の決着は近い。

「うあああああ!!」

「ククク、この糸からは逃れられない」

「ジワジワと…」

「なぶり殺しにしてあげるわ?」

「悟飯…! くっ!」

「余所見とは余裕だな!」

悟飯はブージン、ビドー、ザンギヤのコンビネーションに翻弄されダメージが着実に蓄積されていった。

助太刀に來たピッコロもゴクアに阻まれ助けに行けず、事態は深刻になっていたその時クウラ機甲戦隊が到着した。

「クウラ機甲戦隊!」

「ネイズ!」

「ドレー!」

「サウザー!」

「クウラ機甲戦隊!? 何しにきやがった…」

「貴様等の助太刀だ、クウラ様に感謝するのだな」

「先ずはあの小僧の方に行くか、ドレー」

「おう、すぐに片付けてやるぜ」

「ふっ、天下のボージャック一味と知つての言葉か?」

「お前こそ、宇宙一のクウラ機甲戦隊を舐めるなよ!」

ネイズとドレーはビドーとザンギヤに向かっていき、糸は剥がされ悟飯は逃れられた。

ブージンと悟飯、ネイズとドレーとビドーとザンギヤ、サウザーとピッコロとゴクアと対面した。

「まさか貴様と組む事になるとはな」

「俺が許されているのはアシストだけだ、先頭切つて戦うのは貴様だナメツク星人」

「それでいい、足を引っ張るなよ」

ピッコロはゴクアに突撃し、ゴクアはそれを剣で向かい撃つ。

然しそれはサウザーのエネルギーソードに瞬時に碎かれ、ピッコロの殴りがモロに入りサウザーのエネルギー波も撃たれた。

そのまま攻め立て、吹っ飛ばした後に気弾を空にばらまいた。

「何処を狙っている…！」

「…」

「へっ、周りを見てみやがれ」

「何…？はっ!?こ、これは！」

「喰らえ、魔空包囲弾！」

「ぐぎゃああああ!!!」

通常の魔空包囲弾よりも多い気弾にゴクアは耐えられず、消滅した。

一瞬の決着であった。

「なんだ、口ほどでもない」

「…礼は言わんぞ」

「そんなものはいらん、そろそろネイズ達も終わっている筈だ」

ネイズは頭や腕、足を引っ込めたり電撃で燃やすなどトリッキーな動きで翻弄しザンギヤを撃破。

ドーレもパワー勝負で負けるはずもなく、ビドーは腹を貫かれ爆散した。

悟飯も無事にブージンを倒したようだ。

「俺達機甲戦隊の出番はこれで終わりだ、さらばだ」

クウラ機甲戦隊はポーズを決めた後、その場を立ち去って行った。

そのポーズを見ていた悟飯はポツリと、かっこいい…と呟いたのをピッコロは聞き逃さなかった。

(…アレがかっこいい…のか?わからない)

後に多大な影響が出るとはピッコロは知る由もなかったのだった。

セルゲームの終幕！かめはめ波対かめはめ波！

「おおおおおおー！」

ボージャックはフルパワーでトランクスとベジータに突撃し、拳を振るう。

追い詰められ、冷静さを失いつつあるボージャックの攻撃などベジータ達には到底当たらない。

大きく隙だらけの攻撃を躲し、ベジータ親子の連撃が刺さる。

ボージャックを倒すのは時間の問題だった。

「トランクス！次の攻撃でとどめを刺す、余計な情けなど考えるなよ！」

「はい！奴はここで必ず倒します！」

「ほぎけええええ!!」

ボージャックに怪しい闇が覆い、一気に気の高まる。

その力を乗せてボージャックはフルパワーエネルギー波を放ってベジータ親子を襲う。

「ギヤリツク砲ー!!!」

「死ねえええええ!!」

衝突！お互いのエネルギーがぶつかり合い、その熱量は熱風を引き起こしている。

ベジータ親子の方が優勢に見えたが、さらに闇のエネルギーが増大されベジータ親子が押され始めた。

「野郎、まだこんな力を……！」

「と、父さん……！」

「ふははははは!!」

「このままでは……！」

「何を諦めてやがるトランクス、全ての力を吐き出しやがれ！俺の子ならば、敵を打倒すまで闘志を捨てるな！」

「……！」

ベジータはこれまで、未来からきたという自分の息子の事などそこ

までの思いはなかった。

だが、今は違った。自身に比べればカカロットまでとは行かずともまだ甘い所はあったが、それでもトレーニングを重ね強さを求めるその姿はベジータが認めるに足る戦士なのだ。

だからこそ、ベジータはトランクスをしつかりと息子として見て檄を飛ばす。

「サイヤ人を舐めるなよ！ボージャック！」

「があああああ!!」

「トランクス！」

「はい！」

「くたばれボージャック!!!」

「あああああああああ!!」

2人のギャリック砲はボージャックのエネルギー波を跳ね除け、見事ボージャックを撃ち破った。

ベジータ親子の勝利である。

「はあ…はあ…」

「……トランクス」

「…はい、父さん」

「よくやった」

「…!!はい!!」

これにてボージャックの脅威は消え去った、残りはセルだけだ。

一方その頃、セルと悟空にも動きがあった。

悟空は一時セルの弱体化、つまり18号を吐き出させることに成功したのだが…

ボージャックにも現れた謎の闇のエネルギーがセルにも現れ、完全に戻ったのである。

互角以上の戦いをしてきた悟空も、その変化に対応すべく超サイヤ人2になり戦っていたがそれをも上回っていたのである。

超サイヤ人2ならば本来負けることの無いものだが、超サイヤ人よりも難しい超サイヤ人2の完全制御には至らなかったのだった。

そこで悟飯も参戦し、セル対悟空親子の戦いとなっていた。

「悟飯、セルの奴は多分オラが想像してたのより厄介になっちまった。オラだけじゃ勝てねえかもしれねえ、気合い入れろよ悟飯！」

「はいー」

「ふっふっふ、この力は素晴らしいぞ。この戦いは楽しめそうだ」

セルは凄まじいスピードで悟空の前に現れ、肘打ちで顔面を打ち吹き飛ばした。

悟飯がそれに気を取られたのが仇となり、セルの気功波をもろに受けてしまう。

悟空も瞬間移動ですぐさま復帰し、セルに攻撃するもそれを防がれ防戦一方になった。

「ぐぐ…いお、お父さん…い」

悟飯は己の中に眠る力を引き出したかった、だがその引き出す方法が怒りであってもきっかけがなかった。

セルを倒さなければ地球はなくなってしまう、しかしだからといってまだ殺したくないと思っている。

そんな時だった。

「孫悟飯」

「16号さん…」

カプセルコーポレーションでセルに受けたダメージを修復され、今しがたここに着いたのだ。

そこに迷う悟飯に助言をする為に近づいた。

「孫悟飯、何も平和の為に戦うのは悪いことでは無い。その正義の心のままに力を解放してやればいいのか」

「平和の為に…」

「俺ではセルから何も守れない…だが、お前にはその力があるのだ。

…俺の好きだった自然や動物達を、守ってやってくれ」

「…い分かりました、やってみます！」

悟飯はただ敵を倒すのではない、地球の自然を護る為に拳を振るう。セルを倒さねば、自分が殺らねば守れる物も護れないのだ。

セルという理不尽に怒りの刃を叩きつける。

地球の想いの為に、怒れ！

「うわああああ!!」

悟飯、覚醒。

超サイヤ人2となった悟飯は僅かながらも今の悟空を上回る程、気の大きさは凄いものだった。

「この気は…孫悟飯!」

「悟飯…!」

「お父さん、後はボクに任せてください。セルを倒します!」

「…やれるんだな?」

「はい!」

「…:わかった、おめえに任せただ悟飯!」

「ふふふ、まさか1人で私に勝てるっても?」

「勝てるや!」

セルの問いかけに堂々と勝利宣言をする悟飯に、悟空は少しばかりの嫌な予感が頭によぎった。

これは悟空自身も経験のあるもので、急激なパワーアップというのは過信しがちになってしまう。

いざとなれば…

「大きく出たな小僧、かア!」

セルがフルパワーになって、更にパワーアップした。

それでも尚悟飯は動じずに構えた。

「これが私のフルパワーだ」

「それがどうした」

「くくく、はあああ!!」

セルが拳を放つ、然しそれを頭を逸らすだけで避けて悟飯の拳がセルの鳩尾に刺さる。

それから顎にアッパーを喰らわせ、地に降り立った。

たった2撃でセルはよろめいてしまう。

「おぐっ…:ば、馬鹿な…!」

「終わりだ、セル」

「ち、ちくしょう…！ならばこれはどうだ!!避けてしまえば地球は終わりだ!」

セルがかめはめ波を地上に向けて放った。

だが悟飯は動じない、かめはめ波が迫る中ぽつりとかめはめ波といセルのかめはめ波を押し分け四肢がボロボロになるまでに至った。

「悟飯!トドメをさせ!」

「もうトドメを…?まだ早いよお父さん、もつと懲らしめてやらないと」

「ご、悟飯…!これ以上奴を追い詰めるな!何をするかわからないぞ!」

「…はあああ!」

セルはその隙に身体を再生させ、再び降り立つも体力は消耗しこの勝負は悟飯の勝ちに見えた。

だが、運命はそうさせない。またしても闇のエネルギーが充満し、セルの体力が完全に戻ってしまった。

それ即ちサイヤ人の細胞により死の淵からのパワーアップに他ならず、これでまた悟空親子を上回ってしまった。

「…!?!」

セルが放ったビームが悟飯と悟空を通り抜け、ピッコロの胸を貫いた。

「ぴ、ピッコロさーん!!」

「もうお遊びはせんで、すぐに終わらせてやる…!」

「ぼ、ボクがさつさとトドメを刺していれば…ピッコロさんがあんな事にならずに…」

「か…め…は…め…」

「悟飯!」

「!」

「ピッコロは死んでねえ!だけど今抵抗しなきゃ全て終わっちゃうぞ!」

「波アアア!!!」

「そうだ…ボクが…やらなきゃ!!かめはめ波アアア!!!」

かめはめ波とかめはめ波がぶつかり合い、大きなクレーターが作り出された。

どんどん押されていく悟飯の傍に、悟空も支えに入った。

「悟飯、おめえはまだ全然力を出し切っちゃいねえ！全て出し切っちゃまえー！」

「お、お父さん…！」

「地球のダメージならドラゴンボールで治せる！今オラ達がやらねえとダメなんだ！」

「…！」

「ふはははははは！くたばれ！」

押し負けるかと思ったその時、鋭いエネルギー波がセルの胴体を貫いた。

セルが何事かと横をむくと、上空にクウラが佇んでいた。

「ぐ…貴様は…!!！」

「今だアアア!!！」

「だあああああああ!!！」

文字通りの全力全開の親子によるかめはめ波はセルのかめはめ波を飲み込み、全てがセルにぶち当たった。

その気に飲み込まれ、復活の核すらも消し飛ばしセルは消滅したのだった。

出し切った悟飯は地に倒れ、悟空もドサリと座り込んだ所を仲間達が駆け寄った。

これにてセルゲームは終幕である。

「全く世話の焼ける猿共だ」

「クウラ様、遠方にかんりの戦闘力を検知したのですが…」

「それで？」

「はっ、その者は2名。然しセルのパワーアップの直後検知から外れました」

「となると奴らは空間に関する能力を持っているか、力を隠蔽するのに長けているか…か」

「その様で」

「引き続き注意しておけ、マークは外すなよ」
「はっ！」

サイヤ人の王子

あのセルとボージャックとの戦いの後、オレは孫悟空の住む家に行った。

理由は勿論戦う為であったのだが、孫悟空の嫁に最後まで押し通されて結局延期となってしまうた。

ふつ、超サイヤ人も嫁には敵わんらしい。働かざる者食うべからず、稼げるまで修行も控えなければならんとは……

オレも管理する側なので、嫁……チチの言い分は理解出来たが故に下がったのだ。

殺してしまえば孫悟空と強制的に戦う事は出来たであろうが、そうなるってしまえば後々面倒な事が起こりかねん。

という訳で今カプセルコーポレーションの前に来ている。

「イラツシヤイマセ、ゴヨウケンハ？」

「ベジータを呼べ」

「オレならここにいる、何の用だクウラ」

振り返るとそこにベジータがいた、今回の目的はコイツだ。

惑星ベジータの王子、王の方は塵にも等しい存在だったが息子がこれ程優秀とはな。

今現在限りなく孫悟空に近いレベルの強者だ、それより上となれば孫悟飯ではあろうが。

「貴様、働いてもないで暇だろう。オレと戦え」

「は、はたらいて……ふん、いいだろう。場所を変え「そうなのよ！ベジータだったらいつもトレーニングばかりで仕事しないのよ、もっと言ってみてちょうだい」

「ブルマー！余計な事を言うんじゃない！」

「何よ本当の事でしょう!?トランクスだってこれからおつきくなってくのに父親が働いてないだなんて」

「……………ギザード荒野にて待っているぞ」

痴話喧嘩は犬も食わん、いつまでも見てられるか。

「待たせたな」

「：既に頬にダメージを受けているようだが？」

「黙れ、いいから始めるぞ。貴様ら一族には借りがあるんだ」

「ほう、まあ大方愚弟にこき使われてきたと言った所か。いいだろう、その怒りを以てオレに挑めサイヤ人！」

「ハアアアア！だだだだだだだだだだだだだだだだ！！」

ベジータは挨拶代わりに連続エネルギー弾を放つ。

これは誰でも出来ると思われがちだが、一点集中のエネルギー波とは違い高速で高威力のエネルギー弾を放つのは気の量とスタミナがものをいう。

その弾幕を全てエネルギーを纏い受け流し、ベジータに突貫する。

「何っ!？」

「甘い！」

フェイントを噛ませて裏拳を放つが、ベジータは超サイヤ人となりそれをまたカウンターで返しくらってしまう。

「ぐっ…！」

「どうしたクウラ！きつさと本気を見せたらどうだ！」

ベジータはクウラを吹っ飛ばし、追撃の特大エネルギー弾を見舞う。

クウラに当たり砂埃が舞うと、気の放流によって全てが晴れた。

「いよいよお出ましまして訳だ」

「フン、さあ始めようか！」

クウラは最終形態に、ベジータは超サイヤ人フルパワーになり場を仕切り直す。

初めに動きだしたのはベジータだった。

ベジータは高速で接近し、顔面へ蹴りを放つ。だがそれをものともせずクウラはその手を掴み地に叩きつけた。

だが黙ってやられるベジータではない、即座に立て直し回し蹴りでクウラの体勢を崩し腹部にストレートを叩き込む。

が、それをクウラは手で受け止めて目から怪光線を放つ。

ベジータは身体を逸らして避けると距離を取りギャリック砲を放ち、クウラはエネルギー波で対抗。

気の量をあげたベジータは押し切る寸前に離脱し、クウラの背後を取りクウラを蹴り飛ばした。

「チー！」

「どうやらお前は気を読めんらしいな、それでいてよくここまでやれるもんだ」

「厄介な技術だな、だが直ぐにモノにしてやるぞ。キエエエ！」

立て直したクウラは突貫し、ベジータの前でエネルギーによるフラッシュを放つ。

突然の光に目を抑えたベジータにスレッジハンマーを喰らわせ、地に落とすのと同時に腹部を殴りそのまま地に沿って壁に叩きつけた。

「おぐっ!!」

「くたばれサイヤ人!!」

「くっ!はああああ!!」

ベジータは負けじと気を解放し、クウラを吹き飛ばす。

そして頭突きをかまし…

「くらいやがれ!ビックバンアターーーーック!!」

「チー！」

クウラは両手で受け止めるもビックバンアタックの勢いは止まらず、遂に爆発した。

追い討ちの連続エネルギー弾で更にダメージを稼ぐベジータだが、既にそこにはクウラはいなかった。

「何…!?!」

「後ろだ！」

クウラは背後からベジータを抱きしめ、渾身のパワーで締め付ける。

ベジータは振りほどこうとするも、中々振り解けない。

クウラはそのまま頭から急降下し地面へ突き放した。

「この…!」

「これで終わりだ!」

ベジータの着地と同時に顔面に蹴りを入れたクウラだが、それは空振りに終わりベジータの殴りが横顔に炸裂した。

「ごふ…っ!」

「は…は…!」

「ふ、ふふふ! ははははは! やはりサイヤ人、厄介な種族だ…破壊神が滅ぼすのも領ける」

「破壊神だと…?」

「次で終わらせてやる、全力で来いベジータ!!」

クウラは気を最大限まで溜めてベジータに突撃し、ベジータも呼応するかのよう突撃する。

刹那、2人の拳は両者の顔に入り弾け飛んだ。

地に伏せた2人は立ち上がれずになったのである。

「ほぼ互角とはな…!」

「く、クソツタレ…」

「お、終わったんか?」

「カカロット!」

その場に悟空が瞬間移動で現れ、2人に仙豆を渡した。

「何だこれは」

「仙豆という怪我と体力を回復できる豆だ、食ってみろ」

「オラが言おうと思ったのによおベジータ…」

「そんな事知るか」

「さてと、なあベジータとクウラ。今からオラの家で飯にしねえか?」

「ブルマには伝えてあるのか」

「おお、チチが言つとけてよ。ちゃんと伝えてあつぞ、クウラはどうすんだ?」

「いいだろう、後でそちらに向かわせてもらう」

「そつか、行くぞベジータ」

「…次こそは勝つぞクウラ」

「ふん！望むところだ」

去ったか…

ベジータ、かなりの強敵だったな。

殺し合いとなれば僅かにオレが上を行くだろうが、ふははオレもまだまだ甘いな…

宇宙最凶と呼ばれた一族であるオレにはまだ成長の余地がある筈だ。

今の殻を破るのには、敗北を知らねばなるまい…

その時が、楽しみだ。

強さとは何か

セルゲームが終わってからだいぶ時が経ち、孫悟飯が孫悟空とほぼ身長が揃ってきた頃の話だ。

資源調達の為に、東の都に来たらヤムチャという地球人が振られている所を目撃した。

地球人の中ではトップレベルの強さを持つ筈だが、その姿の体たらくにクウラは疑問を持たずには居られなかったのだ。

「おい」

「ん？お前はクウ……ッ!？」

クウラは手加減して且つ今のヤムチャがギリギリ捉えられる程のスピードで殴った。

「ほう、よくガード出来たな。そこまで腐ってはいないという事か」

「お前……！オレを殺すつもりか!？」

「殺して欲しければ殺すに相応しい敵になれ」

「……はあ、それでお前は何しにこんな所に来たんだ？」

「物資の調達に来たが気が変わった、着いてこい」

「は!?!何で急に」

「早くしろ、地球人」

クウラは返事を待たず荒野に飛んだ。

ヤムチャは不満垂れながらも後に続き、場所は荒野へと移る。

「さて、話をしてやろう。オレは弱者のままにいる奴が心底気に食わん」

「……それがオレだつてののか？」

「そして、夢を捨てきれない癖に諦めている奴もオレは気に食わん」

「……」

「貴様、何故武道家として過ごしていたにも関わらずその体たらくなんだ」

「何故って……ここにはオレよりも強い奴が沢山いる、地球のピンチ

だって悟空達が何とかしてくれた。オレは何も出来ないからな」

「それで戦うのを辞めたという事か」

「……そうだよ、悪いか」

「ああ悪い、貴様は既に過去のギニュー特戦隊より強くなっている。言うなればあのフリーザお抱えの特戦隊を超えて、宇宙で見ればかなりの実力者だ」

「オレが……？」

「その強さを無駄にするなど、些か諦めが早すぎる」

その言葉にヤムチャは顔色を暗くした。

思い当たる節が多いからだだった、同じ地球人であるクリリンや天津飯は自分より上のステージに立っている。

始まりだった悟空との戦いも、善戦していたのは出会った時だけ。ベジータ達サイヤ人との戦いもクリリンが居なければ勝てなかった筈で、自分が生き残っていても何も出来なかっただろう。

セルを足止め出来たのも、天津飯でなければ出来なかった。

自分では役に立たないからと諦めて、武道家までも引退した。

過去にそれでも足掻き、鍛えようとしたがそれも自分で諦めてしまった。

結局の所全て自分で諦めてしまっただけなのだ。

「貴様に足りないのは覚悟と、勝利や強さへの飢えだ。貴様が狼なのなら、飢えて見せろ！その牙を取り戻す為に、今一度剣を取れ！」

「――！」
「安心しろ、殺しはせん。だがその根性を叩き直すまでオレは貴様をぶちのめすだけだ！」

クウラは構えを取ると、ヤムチャへと殴りかかった。

ヤムチャは戸惑いながらも何とかいなし、蹴りを入れる。

だが、ダメージは無いに等しかった。

「どうした、この程度か！」

お返しとばかりに顔面を殴り飛ばし、ヤムチャは岩盤へと叩きつけられる。

クウラはこれまでかと思ったとその時、ヤムチャの表情が変わっ

た。

「くそ……やってやる！オレだって武道家の端くれだ、置いてかれるなんてもうゴメンだ！」

「ふん、来い！」

ヤムチャは気を解放し、クウラに果敢に立ち向かう。

クウラは相手が弱者であれ、己に立ち塞がる敵には一定の敬意は払う。

だからこその一撃であった。

「くう……痛てて、敵わないのはわかってたが一撃で沈められるとは……」

「当然だな。しかしカラは破っただろう」

「ああ……お陰様で目が覚めたよ。オレも修行し直すとするさ、プーアルや皆の事を少しでも護れるように」

「その修行、貴様はサウザーに師事を乞え。ヤツは自身にも厳しく相手にも厳しい、今の貴様には合うだろう」

「あはは……え、遠慮しようかなあ〜なんて」

「……」

「じよ、冗談だって冗談……はは、ははははは！」

かくしてヤムチャは切っ掛けを得て変わっていく事になるが、その話はまたいずれ。

奇妙な2人の物語は一旦幕を閉じた。

新ナメツク星にて

孫悟空達がドラゴンボールを復活させる為、新しいナメツク星に神となれる者を探しに行くようだ。

ネイズから報告を受けたオレは追跡出来るように指示を出し、宇宙船の外に出た。

外では今、ヤムチャがサウザーに扱かれ気絶させられメデイカルマシんにぶち込まれようとしていた。

「どうだ、そいつは」

「クウラ様……はい、この男の筋は悪くは無いでしょうが良くもないと言ったところです。調子に乗る癖とひとつの攻撃をする場合の注意力の散漫をどうにか出来れば、更に上を目指せる筈です」

「ふっ、向上の余地があるのであれば良い。そうでなければゴミ同然だからな」

「ところで、クウラ様は何処かへお出かけに？」

「孫悟空達がナメツク星に行くようだ」

「ナメツク星というと、フリーザ様が敗れた星ですね」

「何でもドラゴンボールを復活させる為らしい、地球の神も元はナメツク星人だから新しい神もナメツク星人という訳だ」

「成程、しかし地球の神だというのはこの星から選ばぬとは……」

「全くだな」

「それで、クウラ様もそのナメツク星に？」

「今の所行くつもりは無いが、今ドレーが孫悟空達が乗った宇宙船を追跡しナメツク星を特定している所だ。何かあれば物見遊山にでも行くがな」

と、サウザーと話していた所にドレーが報告しに来た。

内容はナメツク星の特定、そして謎の巨大機械反応があるということだった。

「巨大機械反応だと？」

「はっ、ここからではそこまでしか分からなかったんで……」

「如何なさいますか、クウラ様」

「……オレ達もナメック星に向かうぞ！出動準備だ！」

「はっ！CIG!!」

「……？なんだその掛け声は」

「最近特撮というものに我々ハマりまして」

「正義の味方とかは兎も角、掛け声や変身ポーズには感銘を受けたんですぜ」

「……そうか」

新ナメック星では、孫悟空と銀色に光る機械が対峙していた。

「おめえは……クウラ!」

「ほう、このモデルと知り合いの様だな？その通り、宇宙最強の一族の中でも飛び抜けた潜在能力を持つコイツの遺伝子を元に作り上げられたのだ。このビックゲテスターの高度な科学力でな！」

「何言っつかわかんねえけど、おめえの目的は何なんだ！」

「俺の目的はこの星を媒体として、全宇宙をビックゲテスターによる管理の元支配するのが目的だ。かつてビックゲテスターを作り上げた科学者、Dr.ゲテスの夢を果たすのだ！」

「……兎に角、おめえはこのナメック星の人達を食いもんにしちまうってんならオラはおめえをぶっ壊さなきゃならねえ」

「ふん、貴様程度にこのオレを倒せるとでも？」

「行くぞっ！ハァー！」

悟空は超サイヤ人となり、その一瞬でメタルクウラの半身を半壊させた。

本来であればクウラの記憶によって超サイヤ人の存在をインプットされているが、ビックゲテスターにはその存在は記録されていない。

その為一瞬で片がついてしまった。

「アレ？思ったより大した事ねえな？」

「ぐ……このパワー、貴様何者だ!」

「オラは地球育ちのサイヤ人だ」

「サイヤ人？サイヤ人は大猿にしかならん筈だ……まさか、伝説の超サイヤ人だともいうのか！」

「そうだ、どうやらオラ達の事はよく知らねえみてえだな」

メタルクウラはその半壊した身で突然高笑いし始め、瞬く間にその身を修復してしまった。

「な、治っちまった！」

「貴様のその強さは見事なものだ、だがその強さによってこの肉体は更にアップデートを果たす！」

メタルクウラはその場から消え、背後から悟空を蹴り飛ばした。

油断していた悟空はモロにくらい、追撃の爆破を叩き込まれる。

「ふふふ、大ダメージを食らってしまっっては立ち上がるのも……何だと？」

「く……こりや本気でいかねえとやばそうだな、おお痛ちち！」

「まさか、アレが本気ではないのか!?サイヤ人のレベルを遥かに超えている……！」

「今度はごつちの番だ！でりやあ!!」

悟空は破れた上の道着を破り捨て、メタルクウラに突撃しラツシユを仕掛ける。

先程とは段違いの猛攻にメタルクウラは対抗するも徐々に身体が崩壊していくのだった。

「トドメだ！かめはめ……波アアア!!」

「そ、そんな馬鹿な……ヌアアアアアアア！」

「ふう……何とかなつたみてえだな」

かめはめ波によって消し去られたメタルクウラ、だが悟空の背後から機械の軋む音がした。

悟空は振り返るとそこには破壊した筈のメタルクウラが立っていた。

「お、おめえ……」

「よくもまあこのオレの身体を木っ端微塵にしてくれたものだ、褒めてやるぞサイヤ人」

「もう一体いるっちゆうことか、勘弁してくれよな……」

ピンチかと思われたその時、空からベジータが駆けつけたのだっ
た。

超サイヤ人となり、悟空の隣にたった。

「カカロット、ここからはオレもやらせてもらうぞ」

「ベジータ……気をつけろ、奴は今のオラよりちいと強えぞ」

「ふん、やるぞ！」

「おう！」

メタルクウラ（が）総力戦

ベジータの参戦により、戦況が悟空側に傾いた。

メタルクウラの学習能力でパワーアップを続けていたが、それさえ上回る悟空とベジータの連携にメタルクウラは爆散。

この戦いでヘトヘトになった2人は、地べたに座り込み一息入れた。

「は……はあ……はあ……な、何とかなったなベジータ……」

「全く……あの強さのヤツをここで仕留められてよかったまであるぜ……」

「はは、オラもそう思うぜ……今度ばつかはな」

その時だった。

崖の上からガシャリと音が響いた。

悟空とベジータの顔が固まり、恐る恐る音のなった方向に目をやる。

メタルクウラが、そこにいた。

まだ一体だけならと思っていた矢先、もう一体のメタルクウラが現れた。

否、一体所ではない。何十何百のメタルクウラが現れたのだった。

まだ序の口だったのだ、絶望の淵に立たされた悟空とベジータはよろけながらも立ち上がる。

「冗談キツイぜ……はははは……」

「く、クソツタレ……!」

「やるしかねえぞベジータ……」

「このまま……殺されてたまるか!!」

「ハアアアアアアアアア!!」

限界ギリギリの超サイヤ人となってメタルクウラの群れに突貫する、だが結果は火を見るより明らか。

三体持つていった所で悟空とベジータは敗北してしまった。

その頃、クウラと機甲戦隊はナメック星に降り立ちナメック星人の誤解を解いてから説明を受けていた。

「成程、ビックゲテスター。確か……」

「はい、以前我が軍が力を貸した研究者の発明かと」

「あの後姿を消した後、捨て置いたのが原因か。オレもまだまだ甘かった訳だ……後始末はオレがすべきか」

「クウラ様、ご命令を」

「ネイズ、ドールは周囲のナメック星人の安全確保と物資の支給。サウザーは孫悟空とベジータのエネルギー反応を追え」

「クウラ様は？」

「オレの姿を模したガラクタに興味がある、そいつらを片っ端から破壊していく。元を壊しても残っているには意味が無い」

「ビックゲテスターの処理はいかが致しましょう」

「ビックゲテスターの科学力は目を張るものがある、上手く利用すれば軍力向上間違いなし。」

「ましては自身の型落ち分身が量産できるのだ、疑う余地もないだろう。」

「利用出来そうなら手に入れてこい、貴様の頭脳をもってすれば容易い筈だ」

「ハッ！」

「では任せたまぞ」

クウラ達はその場から離れ、各々のやる事をしに飛び立っていった。

ネイズとドールは各地にいるナメック星人達に支援を行っていた後、謎のロボット兵160体を一掃。

手応えがないと不満に思っていた矢先に、メタルクウラ一体が現れた。

「おっ、ドール見てみる。アレが噂のニセモノだぜ」

「やつとお出ましまして訳だな、へへへ！」

「油断すんなよドール、ニセモノだったってクウラ様だ」

「そうは言ってもよ、こんな殺意じゃなんも感じねえぞ？本物のクウラ様の殺気と比べたら……」

「貴様ら、このオレを目の前にして随分余裕そうだな」

「来るぞネイズ！」

「おうとも！」

「ククク、大層な御出迎えだな。オリジナルの出現に焦っているのか？」

「『黙れ！急造のメタルクウラとはいえ、この数百のメタルクウラを前に楽に死ねると思うなよ！』」

「学ばんヤツめ、だから貴様の生みの親を殺してやったというのに。ゴミにも満たぬプライドや野心などつまらなすぎて反吐が出る」

「『きえええええ!!』」

メタルクウラ達は包围する様に囲み、クウラへと飛びかかる。

クウラはそれを見やると同時に目から怪光線を放つ。

何体かは爆発したが、それでも何十体ものメタルクウラが襲う。

「死ねえ！」

「そういうのはオレより強くなってからいえ」

「『スーパーノヴァ!!』」

「チツ、面倒な」

スーパーノヴァは避ければいいが、この星を傷つけてしまえばメック星人の利用価値が無くなってしまう。

それは困る、であればどうするか。

要はスーパーノヴァ三連打を逸らせればいいのだから簡単な話だ。

「生憎サウザーの様に器用な真似は出来んがな、力技だ！」

サイキックで左右2つのスーパーノヴァを跳ね返し、真ん中のは蹴りあげて弾く。

それからまるでタイフーンが木々を薙ぎ倒す様にクウラが突っ込んだ所から次々とメタルクウラが壊されてゆく。

「フハハハハ！サンドバックには丁度いい脆さだ、だが足りん！」

ビックゲテスターは間違っていた、戦いは数でありメタルクウラで

あればスペックを落とせば大量量産可能性だ。

しかし余りにも体力が多く、スタミナもそれほど消耗していないのだ。

800を超えた時点で、メタルクウラは姿を消した。

「なんだ、もう終いか。これではまだベジータに喧嘩売った方が楽しめたというのに」

やる事は済んだと、クウラは宇宙船へ帰っていくのだった。

決着！ビツクゲテスター戦！そして…

メタルクウラに敗北した悟空とベジータ。

目を覚ますと目の前にクウラの顔をした巨大なコアの様な物に見下ろされていた。

「良くもまあまだ生きているものだ、だがそれは好都合。貴様らのエネルギーは頂くぞ」

「く…おいカカロット、動けるか」

「何とか…な」

「無駄だ、ここが貴様らの墓場だ！」

メタルクウラコアは自ら生えるコードの束をバラつかせ、悟空とベジータを捕らえる。

捕まってしまった2人は高圧電流を流され、気絶寸前まで追いやられてしまう。

このまま終わってしまうのかと思ったその時、1人の助っ人が到着した。

「ハア！」

斬!!

「ぐっ、貴様は…!」

「おめえは…」

「サウザーか!」

「超サイヤ人2人がかりでこのザマとはな、クウラ様に飽きられるぞ」
「へへへ、そういうなよ。すっげえ強かったんだからよ」

「ふん、礼は言わんぞ」

コードを断ち切られたメタルクウラコアは体勢を立て直す、それは2人も同じ事。

再びメタルクウラコアと立ち会う。

「だが増えた所で貴様らの限界は近い!」

「そうかな? やってみなきゃわかんねえ!」

「カカロットの言う通りだ、サイヤ人に限界なんてあるものか!」

「はあああああああー!」

「ば、馬鹿な!? 貴様らの何処にそんなエネルギーが!」

「くたばれええええ!」

「かめはめ…波あああああ!!」

ベジータのエネルギー波と悟空のかめはめ波がメタルクウラコアを襲う。

メタルクウラコアの誤算は、メタルクウラに掛けたエネルギーが多過ぎた。

そして、サイヤ人の底知れぬパワーを侮った事だ。

「馬鹿な…こんな、こんな事がアアアアア!!」

メタルクウラコアは爆発四散した、もうこれでメタルクウラは現れないだろう。

ここに一先ず幕が降りたのである。

「はあ…何とかなかったなベジータ、ありがとなサウザーも」

「まだ終わりではないぞサイヤ人共」

「何!？」

「まさかまだメタルクウラが出てくるんじゃないやねえだろうな?」

「大本であるビックゲテスター本体を見つけ、処理しなくては第2第3のメタルクウラが現れるかもしれない。だから休んでいる暇はないぞ、ここから各自散開しそれらしきものがあつたら連絡しろ」

そういつてベジータと悟空にスカウターを渡す。

ベジータは慣れた手つきで装着、悟空はつけたはいいものの余りいい思い出がない為不満顔だった。

「オラこんなの付けたくねえんだけどな」

「何故だ?」

「そうか、ギニューの奴にボディチェンジされてその姿を見てたからか。はっはっは!」

「笑い事じゃねえぞベジータ、おめえだつてボディチェンジされかかってたじゃねえか! オラがカエル投げなきやおめえもだつたんだぞベジータ」

「んぐ…!」

「警戒していたら普通は引つかからない、貴様ら2人共馬鹿なだけでどっちもどっちだ」

「……………」

何ともいえなくなった2人はサウザーの号令の元その場を離れ、その後無事にベジータが見つけ出した。

ビックゲテスターはサウザーの手により回収されたのであった。

「なあそれ何に使うんだ？」

「決まっている、支配下にある星の護衛や労働力として使う」

「へえ、やっぱおめえ達良い奴なんか」

「カカロット、勘違いするな。クウラは決して善人ではない、奴の本質はそこまでフリーザとは変わらん筈だ」

「そうなんか？」

サウザーは語った。

かつてクウラに刃向かった星の連中がいて、本拠地に襲撃を掛けた。

クウラは機甲戦隊に連中を捕らえる命令を下し、星の王とその配下達を生け捕りにした。

そして配下の目の前でクウラは王を足から胸にかけて怪光線を放ち、苦しんでいる所を追い打ちをかけるように手足を折った。

赦しを請い、命乞いをする王を最後は頭を跳ね飛ばした。

クウラは残る配下にこう言った。

『オレは大抵の文句や反論は聞いてやらんでもない、だがこうも強行手段にでるのならばこうするしかあるまい。愚かな王を持つとは貴様らも不憫だな』

「そしてクウラ様は手中にある星々に連絡を入れたのだ、お前達を脅かす星の王は打ち滅ぼされた。今後も降りかかる災難はこのクウラが解決してやると」

「…フン、クウラの庇護を受けている内は安寧が約束され菌向かえば殺される。そういうメッセージとしては最適だろうな」

「何も殺さなくてもいいんじゃないかねえのか…？」

「孫悟空、貴様も分かっている筈だ。その場で殺さなくては別の星の

民が脅かされるのだ、見逃したとて配下の星は数多くある」

「つまりそこで消しておかねば後々面倒な訳だ、いつでも直ぐに直行できるわけではないんだからな」

「そういうもんなんか…」

「カカロット、貴様も覚えておけ。貴様の甘さで他の奴が殺される可能性もあるんだ、リクームの件やフリーザの様にな」

「セルの完全体手伝ったベジータの言葉だから軽く感じつぞ」

「…フン！」

「漫才はそこまでだ、クウラ様が待っている」

一方その頃、クウラはと言うと。

「必要な時になれば使わせてもらう、それまで待っている」

「わかりました…ですがくれぐれも…」

「ゴタゴタ抜かすな、何度も言われずともわかる」

何やら密約を交わしていた。

クウラの屈辱、幻見せる森の中

クウラは現在、とある島に来ていた。

機甲戦隊が得た情報によると、この島のどこかに寿命を伸ばし健康に良いとされる薬草があるらしい。

何故態々機甲戦隊ではなくクウラ直々に来ているかと言うと、サウザーはビックゲテスターの調整、ネイズはD r・コーチンの研究所、ドーレはD r・ウイローの研究所に襲撃しているからだ。

因みにヤムチャは天津飯とクリリン、そしてピッコロと組手を行っている。その話はまた後日語られる事になるだろう。

「……こか、悪魔の口の中とはな」

そうしてクウラは悪魔の中へと入っていった。

「ふむ、やはり私だけではビックゲテスターを活かしきるのは難しいか」

「いかが致しましょうか、サウザー様」

「ブルマ博士に連絡を取って協力を仰ぐ、報酬は……ワープドライブ技術でいいか」

部下のムリユレに連絡を取らせ、サウザーはビックゲテスターに最新の新のクウラのデータを打ち込んでいく。

その上で出力を下げることによって制御可能となる筈だが、どうにも上手くいかない。

理論上可能なのだが、こうまで来れば技術不足でしかない。

……何故あんな大天才がこの辺境の星に生まれたのか分からない、その気になれば宇宙に名声を轟かせる事も出来るだろうに。

「それにしてもサウザー様、偽物とはいえメタルクウラと呼び捨てなのも些か気が引けますね……」

「ふむ、確かにな。クウラ様は構わないと仰られていたが、使い捨ての様な物にクウラ様の姿を写すとなると。しかし素晴らしいボディにしようと考えてるとやはりクウラ様に……」

「そこら辺もブルマ博士と相談してみますか」

「そうだな。この武力でいらん誤解を招くかもしれん、護衛として数体配置も考えておくか」

「む、妙な森だな。いや森と言うより、ドーレがやっていたノイージアパートの様な…」

枯れた木々がある森の中に薄紫の霧が発生し、クウラの周りを包み込んでいく。

それがひとつに纏まり始め、やがて形が見えてきた。

「…!？」

長い耳、ぎよろりとした目、痩せ気味の身体。

そして感じる圧倒的プレッシャー、これは…

「何故ここに…破壊神ビルスが…!」

破壊神ビルス、界王を纏める界王神。それを更に上回る力を持つ最強の神だった。

過去に一度、破壊神ビルスとその付き人ウイスがクウラの星にやってきたことがある。

噂は聞いた事があったクウラは、素直に帰ってもらう為に最高の食事と接待をして事なき事を得た。

その筈だった。

突然ビルスはクウラの本力が見たいと言ってきたのである。

舐めきった態度、人差し指だけで相手をすると言われ流石に頭にきたクウラ。

エネルギー等は感じ取れないが、その威圧感に初めてクウラは勝てないと悟っていた。

だが、それでも。己の価値をあの神に示してみせる。

結果は惨敗、遂に神の前には届かなかった。

今も生きているのは単に見逃されたから、実際にはウイスに助けられたのだがクウラには知る由もない。

と、苦い思い出しかない相手が目の前に立ち塞がったのだ。

「…いや、奴はここにはいない筈だ。あの霧が見せる幻の類、だが敵う

のか……？」

「……否……このクウラが戦う前に闘志を折るものか！ 幻だろうが奴は奴、あの時の雪辱を晴らす！」

破壊神は静かに佇んでいる。

「はああああ!!」

クウラは最終形態にすぐ様変身し、幻ビルスに拳を振るう。

だがその拳は空を切り、幻ビルスのしつぽによる強打に叩きのめされてしまう。

「くっ、これならどうだ！」

複数のデスビームを放ち、様子を見る。

すると当たった筈なのに全て通り抜けてしまうのだ。

「クソ……こちらからの攻撃は全て透けるというのに、奴の攻撃は当たるのか。気に食わん、気に食わん！ だが何処かに方法がある筈だ！」

幻ビルスがこちらに殴りかかり、それを何とか腕でガードする。

然し、それも見通して幻ビルスはそのままの勢いで地面に叩きつけ空いている片手で気弾の嵐をクウラに見舞う。

「ぐ……がはっ……こんな、こんな事が……このクウラが……2度までも……」

「む？ 奴の攻撃をガードできた……？ 実体が無くはない……のか？」

幻ビルスは問答無用にクウラに迫る。

猛烈な攻めであるが、クウラは負けじとガードし何とか凌ぐ。

「そこだっ！」

幻ビルスの攻撃が当たる瞬間にカウンターを決めた、かと思いきや拳だけが残り身体が霧に消えた。

「……は、はははは……何でもありか貴様、ズルいぞ」

変幻自在かつ様々な方向から蹴りや殴り、気弾が飛び交いクウラを痛めつけていく。

捌こうにもこうも数が多ければ手の打ちようが無い、完全に詰みだ。

「おぐ、ぐが……っ！」

最早ここまで、とクウラは思った。

だが、その時クウラに変化が訪れる。

「ここまで…だと？このクウラが、ここまでだと!？」

「巫山戯るな、オレはクウラだぞ。宇宙を総べる王がこの程度で…くたばる訳にはいかないだろう!？」

「オレが…宇宙で最強になる者だ！消えろ幻イイイ!!」

クウラは最後の力を振り絞り、巨大なエネルギー弾をぶつける。

幻は消えた、それもいとも簡単にだ。

何故こんなにも呆気ない最後だったのかをクウラは考え、力でもなく時間制限でもないだろう。

ならば…自身に眠るトラウマが幻を見せたのか、それなら納得出来る。

間違いなくオレはビルスに対する恐怖を打ち払ったのだから。

「全く、面倒な森だった。…コイツが例の薬草か」

虹色に輝く薬草をサイコキネシスで持ち上げ、飛び立つ。

もうこの森に用はない。

地球戦士の試合、クリリンVSピッコロ

荒野に今、数名の戦士がいる。

クリリン、ピッコロ、天津飯、チャオズ、ヤムチャ、そしてドールとネイズだ。

彼等が集結したのはサウザーからの伝言で、ヤムチャの現時点でどれ程実力が発揮されるかを見る為に呼び出されたのである。

「しかしヤムチャ、その顔つき見違えたぞ」

「ヤムチャかつこいい！」

「へへっ、そうだろ？」

「腑抜けた顔じゃなくなり、力もつけてきたか…」

「サウザーに修行付けてもらったんですよねヤムチャさん、どんな修行を？」

「…ふっ」

「「「?」」」」

『ヤムチャ、今日は貴様を死ぬ寸前まで追い詰める。存分に足掻き勝ち筋を探し出せ』

『ヤムチャ、今回は重力室にてトレーニングだ。まあ100倍でもいいだろう』

『ヤムチャ、テンネンマンを500体用意した。全て倒せ』

「…とまあ、こんな所か。楽観的過ぎるからそこも叩き直す為だったのもあった」

「よく今まで死ななかったな…」

「ヤムチャえらい！」

「ひええおつかねえ修行だ」

「しかし効果覲面だったらしいな」

「ああ、他にも色々あったが…もうお前達にもただじゃ負けないぜ」

そこ負ける前提なのかとピッコロにツツコミをいれられ、ワイワイしている所にネイズが仕切り直す。

「おいお前ら、おしやべりはここまです。今からお前達には試合してもらおう」

「第1試合はピッコロとクリリン、第2試合は天津飯とヤムチャ、第3試合はチャオズと…ネイズだ」

「ピッコロが相手かあ、天下一武道会以来だな」

「ふっ、あの時の様にオレが勝つがな」

「こつちも天下一武道会を思い出すな、あの時の借りは返させてもらうぜ」

「全力でこい、ヤムチャ」

「ボクがネイズと…!?」

ドンマイ、チャオズ。

こうして組み分けられ、舞台にピッコロとクリリンが向き合う。

この中ではトップクラスの實力者で、再生能力と魔族特有の魔術を使うピッコロを相手に、クリリンは機転と気のコントロールで対抗していくだろう。

「覚悟は出来たか、クリリン」

「おう！ピッコロに勝って、18号さんにいい所を見せるんだ！」

「れ、恋愛と言う奴か…わからん…」

『試合始め！』

「はっ！」

初めに動いたのはクリリン、目眩しに気弾で足元に煙を上げて姿を消す。

ピッコロは冷静に気配を探る、クリリンは一気に目の前に飛び出した。

「！」

「太陽拳！」

眼前で太陽拳を食らってしまったピッコロは思わず手で目を押えてしまい、クリリンの肘打ちが腹に決まる。

追撃の気功波をピッコロは何とか弾き、カウンターに出る。

「ハア！」

「うわわっ!?!」

ピッコロは怪光線を目から放ち、クリリンが避けた所に蹴りを放ちクリリンヒット。

吹っ飛ばされたクリリンを更に地面に叩きつける。

ダメージを置いながらも着地して空に目を向けると既にピッコロの姿はなく、背後から後頭部を殴り飛ばされてしまった。

「いつてて……やっぱ強えなピッコロ」

「まだ終わりではないだろう?」

「当たり前だ!はああああ!」

クリリンは気を貯めると大きな球体の気弾を置くように放つ。

その気弾は空中で停止して、クリリンの前にある。

「クリリンの奴何をする気だ……?」

「わからん、だがクリリンの事だ。何か策があるのだろうか」

「…へへ、はあ!」

クリリンはその気弾をピッコロに向けて飛ばす、だがそのスピードはスピードが遅かった。

「ベジータ達との戦いで見せた奴か?」

「どうだろう…な!」

「なんだと!」

瞬間、気弾は弾けて細かい気弾へと変わり流星のようにピッコロへと突き進んでいく。

全て当たれば大ダメージとなる気弾は避けても追尾してピッコロを襲う。

つまり弾き飛ばすか消滅させるしかない、がそこにクリリンも加わってきた。

「くっ!」

「だだだだだだ!」

クリリンの攻撃を捌きつつ、尚且つ気弾の嵐をも対処しなければならぬ状況で少なからずダメージが蓄積していく。

一方クリリンも、ピッコロの攻撃と気弾操作に意識が割かれているので集中力が試される。

しかしピッコロもそれを読んでいるので、クリリンが作ってしまっ

た隙を見逃さない。

「そこだ！」

「あっ！」

ピッコロが腕を伸ばしクリリンの足を掴み、ぶん回す。

クリリンは自身の気弾を一身に受ける形となってしまう、ダメージを負い空に吹っ飛ばされる。

「魔空包围弾！」

「こ、これは不味いかも……」

「もう逃げ場はない、バリアなど張る事が出来んだろう。降参するかクリリン？」

「……参った、俺の負けだ」

「勝負あり！」

決着は魔空包围弾による降参、勝利はピッコロであった。

次はチャオズとネイズだったが、超能力が通じずに基本スペックだけで負けてしまう。

最早語る所なし、チャオズに必要なのは基礎的な修業ではあるが天津飯との修行でしている筈。

ともすれば残念ながらそこがチャオズの限界という事だ、可哀想だがこれが現実である。

ライバル衝突！見せろ怒涛の狼牙風拳！

「ヤムチャ、お前と戦うのも天下一武道会以来だな」

「あの時は足折られて無様に負けちまったが、今回は勝たせてもらおうぜ」

「ふっ、来い！」

ヤムチャが地を蹴り天津飯に近づきエネルギーを纏った拳で殴り掛かる。

天津飯はそれをガードするも、そのエネルギーは天津飯の腕を弾き飛ばし顔面が露になる。

その隙を逃さずに纏い直した拳で強打、追撃にかめはめ波を放つも立て直した天津飯により無効化される。

「やっぱ防がれるか！」

「俺にかめはめ波は通用せんぞ！」

「本当に厄介な技だな…」

「今度はこちらから行くぞ！」

天津飯は四妖拳と口にすると背中から腕が2本生え、通常の2倍の攻撃がヤムチャを襲う。

然しそれもヤムチャにとってはサウザーよりも劣る攻撃速度と手数でしかなく、それをいなして対抗する。

「ダダダダダダダ！」

「まだまだ、サウザーに比べたら遅いぜ！」

天津飯の四妖拳の猛攻の一瞬の隙をつき、顔面に気功波を放ち天津飯はそれを顔を逸らして避けた。

新たに出来た隙をヤムチャは見逃さず、足払いをした所を足を掴み投げ飛ばす。

「ぐっ!?!」

「くらえ！新・練気弾！ハイー！」

以前天下一武道会で見せた練気弾はエネルギーを掌に集める事に時間をかけねばならなかった、だがそれもサウザーとの修行を得て手

早く出せるようになったのだ。

空を駆け繰気弾から逃れようとする天津飯、だが延々と繰気弾は追ってくる。

そこで天津飯は繰気弾に向けて気弾を放つ。

だがその放った気弾は繰気弾にぶつかる事無く、繰気弾はそれを掻い潜り尚も天津飯に突き進んでいく。

「なんだと!?!」

「へへっ」

ここで繰気弾の強みが出てくる。

この追尾型気弾というのはピツコロも使う程の便利性能をしている。

自動追尾型の気弾は放った対象を着弾するか何かにぶつかるかで爆発する、しかし自動追尾型は放った後は本人からのコントロールから離れぶつかるまで追尾する為相殺されては効果が無くなる。

しかしヤムチャの繰気弾は放った後も自身で操作している、つまり相殺する前に躲されるのだ。

「チッ!」

天津飯は腕を交差しガード、天津飯が被弾したと同時にヤムチャが背後に周り背中に膝蹴りをぶち込んだ。

「がつ!!」

「はああああ!新・狼牙風風拳ンンン!!」

追撃に新狼牙風風拳を天津飯に見舞う。

天津飯が何とか捌こうとするが、ヤムチャの集中力は極限まで研ぎ澄まされガードを掻い潜り顔や胸や腹に狼牙風風拳が襲う。

「ハイハイハイハイハイハイ!!」

「ぐっ!うおおおおおおああああ!!」

「ハイハイ!!」

トドメの狼の牙が天津飯を捉え吹き飛ばされ、フルパワーエネルギー波を放った。

追撃は成功し天津飯は被弾してしまう。

地に落ちた天津飯はよろよろと何とか立ち上がる。

「はあ……はあ……強くなったな……」

「は……はは、そうだろうか？」

「オレもそろそろ限界だが……お前もエネルギーを大量に消費して、限界に近いだろうか？」

「このまま勝たせてもらうぜ……」

「オレとて諦めた訳ではないぞ、これが最後の攻撃だ！」

「望むところだぜ、来い！」

2人はエネルギーを溜め始め、風がふきあれる。

「行くぞ、超どどん波ー!!!」

「かめはめ波ー!!!」

太いどどん波とかめはめ波が激突、鶴仙流と亀仙流の技が拮抗する。

だがヤムチャは体力は残している為徐々に押されていく。

「終わりだー！」

かめはめ波がどどん波を押しつけて天津飯に直撃。

今ここにヤムチャのリベンジが果たされたのだった。

「勝負あり！やるじゃねえかヤムチャー！」

「やった……勝ったぞー!!」

「完敗だ……ったな」

「すげえ……ヤムチャさん、とんでもねえや」

「ヤムチャ、強い！」

「ふん、腕を上げたな」

「あ、あら？」

ヤムチャが突然ふらふらになって地に倒れた。

気が抜けて疲労が来たと判断され、今回はここでお開きとなった。

「とうとう時が来た、グモリー彗星が近づくと今こそ復讐するチャンスだ」

「……」

「ふふ、ふああはははは……！ではしっかり留守番しておくんだぞ」

「はい……父さん」

新たなサイヤ人、ブロリーと。パラガスでございます

セルゲーム終幕から数ヶ月後、Z戦士一行はお花見に来ていた。クリリンが下手くそな歌を披露したり、悟飯と（無理やり付き合わされた）ピッコロのマジック等盛り上がっていた。

そんな中、空から謎の宇宙船が着陸する。

扉が開くとゾロゾロと兵士達が現れ道を作り、その道を一人の男が近づいてきた。

「探しましたぞベジータ王子」

「貴様、サイヤ人だな？」

「パラガスでございます」

「何をしに来た」

「息子と同胞と共に新惑星ベジータを復興すべく活動しております。是非とも新惑星ベジータの王となって頂きたくやってきたのです」

「何？新惑星ベジータ……」

「父さん、いかにも怪しいですよ」

「そしてベジータ王！突然現れ南の銀河を破壊し尽くした伝説の超サイヤ人を倒せるのは、貴方しかいません！」

ベジータは少し考えた後で、答えを出した。

「パラガス、案内しろ」

「父さん！」

「トランクス王子、貴方もどうぞ？」

パラガスが歩き出し、ベジータはブルマの前に行く。

「ねえベジータ、本当に王になりに行くつもり？」

「奴の狙いは恐らくオレだ、パラガスはオレの父ベジータ王が追放したサイヤ人だからだ」

「なんですって？」

「トランクスやお前が人質に取られては面倒だ、お前達はヤムチャ達という。わかったな？」

「……わかったわ、気をつけてね」
「ああ」

「新惑星ベジータまで暫くかかります、この部屋でゆっくりお待ちください」

パラガスが部屋まで案内すると、お辞儀をして去っていく。

トランクスはベジータの方に向きかえり、話し始めた。

「父さん、これからどうするんですか？」

「パラガスの戦闘力自体は大した事はない、だが奴の顔を見るに絶対の自信がある。息子が強いか、同胞とやらが強いか……両方かだ」

「……何か嫌な予感がしますね」

「そして伝説の超サイヤ人、銀河を破壊し尽くすというデタラメな力を持つ奴もいるらしい」

「そうですね」

「いずれにせよ相手はオレ達と同じサイヤ人、油断はするな」

「はい。でも父さん、悟空さんやピッコロさんにも来てもらった方がよかつたんじゃない？」

「カカロットなんぞ呼ばなくても勝手に来るだろう、それにオレもお前も超サイヤ人2に慣れるようになった。カカロットや悟飯が来る前に終わらせてやる」

「父さん……」

「いつまでもカカロットに先をいかれてたまるか！」

「それが本音じゃないですか父さん」

「フン！」

「二」ベジータ王バンザーイ！ベジータ王バンザーイ！「三」

新惑星ベジータに到着し、降りると数々の兵士がベジータを歓迎した。ベジータは慣れているのか対して興味を示さず、トランクスは少し居心地が悪そうに顔をしかめた。

「宇宙中から集めたならず者達ですが、皆ベジータ王に忠誠を誓っております。そしてそこにいるのが……」

「ブロリー……です」

「ブロリーだと？やはり……」

「どうかしましたかな？」

「何でもない、おいブロリーと言ったな。貴様は超サイヤ人になれるのか」

「は「お待ちください！私より戦闘力が劣るブロリーが超サイヤ人だなどと……ささ、宮殿へ行きましょう」

あからさまに被せてきたパラガスに対し、ほぼ確定となったブロリー＝伝説の超サイヤ人。

一先ずベジータはパラガスの言葉に従い、宮殿へと向かう事にした。

「父さん、いいんですか？」

「翌朝叩く、それにオレにとってはどうでもいいが奴隷共や新惑星ベジータの真偽は気になっているんだろう？今夜に掴んでこい」

「は、はい！」

「悟空よ、そろそろベジータ達を追いかけんか？」

「大丈夫だって界王様！ベジータは強えし、今はトランクスも行ってる。オラも負けてらんねえからな、早いとこ超サイヤ人2に慣れなきゃだしよ」

「ううん、それでもなあ……」

「それによ、伝説の超サイヤ人っちゅうのは界王様から見ても今のオラ達より遥かに強えかも知んねえんだろ？なら出来るだけ強くなつてねえと、瞬間移動で直ぐに行くことが出来んだからさ！」

「不安じゃのう……」

「それよりよ界王様、クウラは今どうしてるんだ？」

「クウラか？クウラは……新惑星ベジータ寄りの星でトレーニング中の様だな」

「クウラもか、なら余計に負けてらんねえな！フンツ！フンツ！フツ！」

「頼もしいんだか何だか……」

真夜中の襲来、超サイヤ人ブロリー

クウラの1日は身を清めた後、トレーニングを行い再びシャワーを浴びた後に朝食。

そして部下からの報告を聞き流しつつ食べ終わると、執務室に籠り仕事を始める。

そこにサウザーが入ってきた。

「クウラ様、ブルマ博士から連絡が」

「何だ、サウザー」

「今ベジータが突然現れたサイヤ人と共に新惑星ベジータに向かいました」

クウラは手を止め、サウザーに向き合った。

「新惑星ベジータ?」

「はい、惑星ベジータの復興と伝説の超サイヤ人を討つ為だとか」

「伝説の超サイヤ人……」

「何でも南の銀河を滅ぼす勢いだったとか」

そこでかつてフリーザから聞いた事がある超サイヤ人の伝説を思い出す。

大幅に戦闘力が上昇し、理性が失われ破壊の限りを尽くす伝説の超サイヤ人。

孫悟空達の超サイヤ人は理性もあり破壊等にもうつろわない為、噂が過大解釈されたものばかり思っていたのだが。

「で、そのサイヤ人の名は」

「パラガスです」

「……………思い出した、確か1度惑星クウラに来たサイヤ人だな?」

「はい、情報処理や計算能力があり、当時のエリート層サイヤ人として高い戦闘力の持ち主で優秀でした」

「だが惑星ベジータに帰還してから処刑されたときいたが、生きていたか」

「現在の姿はこちらです」

現在のパラガスの姿と、昔のパラガスが写し出される。

現在は目の傷があり髭が生えていて、若い時にはそれがなかった。

「老けたな」

「因みに処刑の内容は謀反による物とされていましたが、親子共々処刑されていたと聞きます」

「ふむ……」

クウラ軍のデータスペースには、現在のフリーザ軍から惑星ベジータのサイヤ人に関する事まで様々ある。

クウラは慣れた手つきでパラガスとその息子を調べあげた。

「ブロリー……生まれた時から戦闘力が10000以上だと!」

「それは、確かに異常な数値ですね」

「母体はブロリーが誕生と共に死亡、これ程の戦闘力の赤ん坊ならば当然かもしれないな」

「彼等の目的は十中八九、ベジータ王への復讐でしょうね。当の本人はフリーザ様の手により消滅、ならば生きているベジータという訳でしょう」

「……まあいい、何がともあれ溜まった物を片付けねば。それとドレに言っておけ、字が汚いと」

「はっ」

真夜中、トランクスは調査の為に動き出そうとしていた。

「では父さん、行ってきますね」

「ああ、気をつけ……トランクス!!」

「えっ、うわあ!?!」

ベジータがトランクスを突き飛ばし、その場から飛び離れると一人の男が突っ込んできた。

超サイヤ人になっているブロリーだ。

ブロリーはベジータに目をつけると、そのまま殴り掛かる。

「おおおおお!」

「コイツ、超サイヤ人になってやがる!」

「父さん!」

「離れているトランクス！ちゃああああ!!」

「うおおおお!!」

ベジータもすぐ様超サイヤ人に変身し、応戦。

場所も変わり湖の近くにまで、ベジータは吹っ飛ばされた。

空中停止すると既にブロリーは目の前、顔面を殴っても血は出たがダメージは軽かった。

「おおおお!!」

「チツ！まるで獣みたいだな！はああああ！」

負けじとベジータはブロリーの乱撃をカウンターで弾き、激しい肉弾戦へと移行。

的確に顎や鳩尾と攻撃を通すが怯みさえすれ、ブロリーは止まらない。

「クソツタレ、これならどうだ!!ビツクバンアタック!!」

「うおお！」

「そ、そんな……父さんのビツクバンアタックを跳ね返した!？」

「止まれブロリー！」

そこにパラガスが飛んできて、謎の装備をブロリーにかざすとブロリーの戦闘力が徐々に下がっていく。

「パラガス！これはどういう事だ！」

「お待ちください！ブロリーは稀に暴走してしまうのです、なのでこの制御装置で制御するのです。息子は大切な対伝説の超サイヤ人の1人、どうかお許しくださいベジータ王……」

「……いいだろう、次はないぞ」

「ははあ！行くぞブロリー」

「はい……」

パラガスとブロリーが去った後、ベジータは舌打ちした。

これでブロリーが間違いなく伝説の超サイヤ人である事が確定したからだ。

「父さん、奴が伝説の超サイヤ人ですね」

「ああ、コイツは遊んでる場合じゃあないな。恐らくオレとカカロットでも相当キツイだろう」

「そこまでですか……」

「全く嫌になるぜ、次から次へと化け物が出てきやがる。クウラの奴と敵対関係でなくてよかったまである」

「二人同時に相手はしたくないですね、確かに」

「兎に角、宮殿に戻るぞ。よく寝ておけ、警戒はオレがしてやる」

混血サイヤの魔閃光！余裕の伝説！

翌朝、悟空がピッコロと悟飯を連れこの惑星に來た瞬間に事態が急変した。

「カカロット……」

「おめエがブロリーっちゅう奴か」

「カカロット……カカロット……!!」

「少しは会話しろよおめえ、何か気持ちわりいぞ」

大気が震え、ブロリーの周りを中心として謎のオーラが荒れ狂う。

パラガスが抑えようとするも、装置が爆発。

そして……

「カカロットオオオオオ!!」

遂にブロリーは伝説の超サイヤ人へと覚醒した。

ベジータ達を感じ取ったのは、果ての無い気の嵐と底抜けの破壊衝動。

伝説の超サイヤ人は悟空へと襲いかかる。

「お、おどれえた……伝説の超サイヤ人っちゅうのはここまですげえんか！くっ!!」

「フツハツハツハツハ！」

「孫！ツエエア!!」

悟空とピッコロのタッグで迎え撃つも、一切ダメージが通らない。

超サイヤ人に変身してこれなのだ、伝説は伊達じゃない。

「お父さん！」

「来るな悟飯！オラ達はどうにか抑える、氣い溜めて超サイヤ人2になるんだ！」

「は、はい！」

「悟飯さん！俺も一緒に！はあああ！」

悟飯とトランクスはその場を少し離れフルパワーで超サイヤ人2になる為、氣を貯め始める。

悟空ピッコロベジータは、悟飯達の邪魔にならないよう引きつけるつもりだったが、ブロリーは悟空とベジータにしか興味が無いよう

だ。

「オラ達も本気でやってんのにここまで効かねえんか」

「雑魚がいくら集まろうとも、雑魚は所詮雑魚だ！」

「このバケモノめ……！」

「フハハハハハ！俺がバケモノ？違う、オレは悪魔だ……ははははは！」

「バカ笑いしやがって……クソツタレが！」

「ガアアアア！」

「ピッコロ！危ねえ！」

ピッコロはガードを崩され、ブロリーの剛腕が迫る。

それをカバーする形で悟空が間に入るが、悟空諸共吹き飛ばす。

残ったのはベジータだ。

「ベジータ、お前だけは簡単には死なさんぞ」

「フン、やってみやがれ！」

ブロリーはベジータに肉薄し、猛打を繰り返す。

本来ならば敵わなかったであろうベジータだが、超サイヤ人2となった事やクウラとの戦闘経験により大幅に実力を上げている。

ブロリーの攻撃を持ち前の戦闘センスで何とか捌きつつ、反撃の機会を伺っていた。

「チッ！」

「流石サイヤ人の王子と褒めてやりたい所だ、フウン!!」

「ぐおお!？」

遂にブロリーの拳がベジータを捕え、ベジータは吹っ飛ばされた。

追い打ちにブロリーは突撃するが、悟飯とトランクスが立ち塞がる。

「ブロリー！」

「これ以上好きにはさせない！」

「フツハツハ！」

「たーっ！ダダダダア！」

「はアアアアア！」

悟飯とトランクスのコンビネーションで、ブロリーに迫る。

現状でここにいる戦士の中で潜在能力含め強いのは悟飯、闘いたく

はないが引いてしまえば宇宙は破壊されてしまう。

トランクスもやつと守った未来を、あの惨劇の様にしたくない。

二人の覚悟と鋼の意志は、遂にブロリーに追いついた。

徐々にブロリーが押され始めたのだ。

「ぬう………」

「トランクスさん！」

「はいー！」

「魔閃光ー!!!」

二人の魔閃光がブロリーを包む、最高のダメージとなっただろう。

悟飯とトランクスは顔を見合せ喜んだ。

しかし……

「悟飯！トランクス！油断すんじゃねえ！」

「えっ………」

「悟飯さん!!」

「ヌウン!!」

「カハッ………」

「ごはーん!!!」

「悟飯さーん!!おぐうっ!?!」

ブロリーの蹴りが悟飯の腹に刺さり、廃墟に衝突。

ついでとばかりにトランクスの顔面をブロリーは掴み、建物にめり

込ませれた。

意志も矜恃も、破壊者の前には何も意味をなさないのだ。

「カカロットオオオオオ!!」

「ベジータ！ピッコロ！いけるか!?!」

「当たり前だ！」

「オレはサイヤ人の王子だ、負けてたまるか！」

「「おおおおお!!」」

「ふむ、随分と馴染んできたな。ビックゲテスターよ、適合率はどうかだ」

『99……100%!完璧よおくん!興奮しちゃうわあん!』

「……………そうか、おいサウザー。このキャラはどうかならんかったのか」

「変えようにもうんともすんともせず……………申し訳ございません」

「まあよくはないがいい、仕事さえこなせば何も言うまい。では出立するぞ、船を出せ」

「はっ！」

「フツフツ、新生クウラの力を伝説とやらに叩き込んでやろう……………！」

銀色の戦士と進化し続けるバケモノ

悟空とピッコロ、そしてベジータは三人でブロリーに向かうも未だに伝説は健在。

ピッコロも何とかついて行こうとするも、技ではどうにもならずタミナが切れたところで吹き飛ばされた。

悟空とベジータのタッグはスタミナオバケではあるが、それをも超えるブロリーに押されつつある。

ブロリーは戦いが続く程気力が増えていく、まだ先があるのだ。

「気が高まる……溢れる……！フツハツハツハツハツハ！！」

「へへ、参ったな。てんで堪えてねえぞ」

「く、クソツタレめ……」

「カアアアアア!!死ねえ！ベジータ!!」

「なっ！ふおおお!!」

「ベジータアアア!!」

ブロリーはベジータの顔面を掴むと、その先にあつた岩盤に叩き込んだ。

もう終わりか……？とブロリーは問いかけつつ、ボディブローの追撃によりベジータは超サイヤ人2が解けて崩れ落ちてしまう。

これで動けるのが悟空のみになってしまったその時、空から宇宙船が降りてきた。

「この気はー！」

「……？」

『新惑星ベジータに到着したわん、クウラ様あん！』

「ご苦労、お前達は一旦上空に行け。サウザー！ボロ雑巾共を避難させておけ」

「はっー！」

「クウラ、きてくれたんか！」

「フツ、貴様らが頼りないのでな」

「また一匹……ムシケラが死にに来たか」

「このオレを前にしてムシケラ扱いとは、貴様も見る目がないな」

今のオレは決して死ぬ事の無い身体を手に入れたのだ、負ける筈もない。

だが！オレは弟の様には甘くはない、徹底的にやってやる。

「ブロリーと言ったな、光栄に思うがいい！この新形態を、死ぬ前に味わえる事を！かあああああ!!!」

「…な、なんだ!?!クウラの周りに銀色の気が…!」

「ムウ…?」

クウラの気がどんどん膨れ上がり、銀色のオーラが頭になる。

気の爆発から晴れるとそこには、銀色のアーマーを身にまといそれでいて何処か禍々しさすら感じる姿に変貌した。

「これがビツクゲテスターの科学力と、我が一族の細胞が組み合わせだったアーマードクウラだ！」

「す、すげえ気だ…!」

「さあ……始めようか！ハア！」

「フハハハハハ！来い！お前を破壊し尽くしてやる！」

ブロリーが肉薄し、豪腕を振るう。

それに合わせクウラも拳を放ち衝撃が大気を震わす。

2人は徐々に上空へと移行していき、辺りは段々と崩壊していった。

現段階のブロリーの攻撃をもともせず、全力全開でブロリーを叩きのめすクウラに悟空は驚きを隠せなかった。

「カカロット！」

「ベジータ、大丈夫か？」

「フン、それよりアレはクウラなんだろう？」

「ああ、今のブロリーならクウラが倒しちまうかもしれねえ」

「……まだ上があるという事か」

「ベジータ、オラに1つ提案がある」

「？」

「フュージョンだ」

「フュージョンだと？何だそれは」

「ぬうう！」

「伝説の超サイヤ人といえどこの程度か？随分と拍子抜けだな」

「ブロリーは目の前の銀色の戦士を何度か吹き飛ばしたが、その部分が即座に再生し強度が増していた。

「キリがないこの状況に苛立ちを隠せずに、どんどん攻撃が荒くなつていく。」

「無駄だ、このオレの身体は幾度となく再生し更に強くなる。貴様に勝ちはない！」

「ならば破壊し尽くすだけだ！うおおおおお!!」

「……何だ、このパワーは!?まだ上があるというのか!？」

「うおおああああ!!死ぬがいい！」

「このオレが負けるか!!理性なき獣が!!」

「終始圧倒していたお互いの差がどんどん縮まり、気の大きさがクウラを上回り始める。」

「このオレも成長しているというのに、貴様は更に上を行く成長度か……！」

「フハハハハハ！ここがお前の死に場所だあ！」

「がつ!!」

「特大の気弾がクウラの腹に直接叩き込まれ、内部に過大なダメージを追ってしまう。」

「内臓をズタズタにされてしまえばいくらアーマードとはいえ、再生に時間がかかる。血反吐を吐きながらもヨロヨロと立ち上がるクウラに、悪魔の手がかかるその時。」

「……誰だア？お前は」

「貴様は……孫悟空……いやベジータ……なのか？」

「黄金の究極戦士が舞い降りた。」

「オレは悟空でもベジータでもない、貴様を倒す者だ!!」

黄金の戦士ゴジータ爆誕！熱戦・烈戦・超激戦！

「誰だあお前は……」

「俺は悟空でもベジータでもない、俺は貴様を倒す者だ!!」

キラキラと黄金に輝く合体戦士、宇宙でも指折りの実力のライバル同士がひとつに合わさった究極の姿。

神々しさを感じさせるその戦士に、ブロリーそしてクウラは思わず目を見開いた。

「ぬうう……!!」

「この力は……何だ……!?!」

「……」

「いくら雑魚二人が合体したとて、このオレを超える事は出来ぬ!!」

ブロリーは更に気を高めて豪腕を振るう、黄金の戦士ゴジータは避ける事もなく身動きせずに顔面で受け止めた。

ブロリーのラッシュをもものともせず、互角以上に受け止めそして流しカウンターを入れていく。

「ウオオオオオオ!!」

「フッ!」

「うごああああ?!」

痛みだ、痛いぞ何だこれは。この身に何が起きている!

幼い頃以来その圧倒的なパワーで周りを寄せつけなかったブロリーは、目の前の戦士に戦慄していた。

伝説の超サイヤ人たるこの自分こそが最強であると、信じて疑わぬ筈だったのが今はどうだ。

心のどこかで目の前のサイヤ人には敵わない、そう思い始めていた。

「殺してやる、殺してやるぞ!!かあああああ!!死ぬがいい!!」

緑色の気弾を手に溜めてゴジータに放つ、近づくにつれそれはどんどん巨大に変貌していく。

あたりの数少ない自然や

一方ゴジータは動かない、じつとそれを見つめている。

ここでひとつの悲劇が起こってしまった。

「かああああああ!!」

クウラはその気弾を止める為に立ち向かったのだ、それだけなら悲劇でもない。

如何せんタイミング、間が悪かった。

飛び出した瞬間とゴジータがかめはめ波を放つ瞬間が合わさってしまった。

つまり……

「あっ」

「う、うおおああああああ!!」

ゴジータのかめはめ波はクウラ諸共ブロリーの気弾を飲み込みブロリーに向かっていく、それをバリアーを張って防ぐがそれも適わず宇宙に飛ばされていく。

「ばああああああああああああああああ!!」

こうしてブロリーは討ち果たされた、尊い犠牲と共に……

「……やっべえな、クウラまでやっちまったぞ」

「……」

「なあベジータ……」

「うるさい」

悟空とベジータが変身が解けて、そこから30分経った。

未だクウラの気を感じとれず、自らが放ったかめはめ波のせいで死んでしまったとしたらもう目にも当てられない。

グモリー彗星が近づいてくる為、悟飯達には先に宇宙船で帰ってもらった。

それはそうとして脳天気な悟空と、敵には容赦はしないベジータでさえも罪悪感が胸にあった。

クウラが何故あの行動を取ったのか、理由には心当たりしかない。

要は自分達が調子に乗っていたせいで、クウラはあの行動をおこし

たのだ。

クウラの行動原理は周りに最小限の被害で済ませ、敵を討つというのがある。

それが善か悪かはさておき、あの場でクウラが行かなければ周囲が無駄に破壊されてしまっただろう。

「……ベジータ、地球に帰ったらクウラを生き返らせっか」

「……そうだな」

「おい、馬鹿ザル共……」

「ひえっ!?!」

「そこに正座しろ!!!」

「だから貴様らはその油断にクドクドクドクド……」

「な、なあクウラ、ほらもうグモリー彗星が来ちまつてるしよ……?」

「そ、そうだ。早く移動しなければオレ達は宇宙の藻屑になるぞ!」

「……かあ!!」

振り向かずに後方にエネルギー波を放ち、グモリー彗星を破壊してしまった。

このお調子者の馬鹿二人を叱らねばならぬ、説教に関してクウラには遠慮を知らない。

「大体孫悟空貴様、自然を不必要に破壊したくは無い口ではなかったのか?それがなんなんだお前は!」

「い、いやあそれは……その……」

「そしてベジータ!」

「な、なんだ?」

「貴様はその余裕ぶつたり慢心で痛い目に見ると、何度やれば理解出来るのだ!!」

「ぐっ……」

「戦闘を楽しみたい気持ちはわかるが、それとこれとは話が別だ愚者が!!さっさと打ち返せばいいものを、ぼーっと見てる場合か!!!」

「ぼーっと見てた訳じゃ」

「口答えするな！オレだったからいいものを、これが悟飯やトランクスだった時や二人の気持ちの事を考えろ！！余計な不安を父親が抱えさせてどうする！」

「うっ」

何とも締まらない結果になったが、ここから三時間の説教の末地球に帰還するのであった。

クウラは後日チチとブルマに感謝の言葉と、とびきりの料理を贈られたそう。

「カ…カ……ロツ……ト……」

悪魔はまだ、眠らない。

クウラ発つ！おいでませペンギン村！

「なんだと？異空間…？」

「はっ、我々三人が調査にその村に立ち寄ったのですが……」

「パツと見は普通の村だったはずなんです、だけど入った瞬間に景色がガラッと変わったんだクウラ様！」

「もう周りの景色も今までいた所ではなく、遊ぶ少年少女は以前見かけたモデルケースよりちんまいというのも」

「そして極めつけには、山や自然に顔があります。あろう事か排泄物にもあり、動きます」

「は？」

「これだけであれば百歩譲ってそういう事もあると、考えますが異空間だと判断したのは太陽です」

「太陽も顔があるんです！意味がわかりません!!」

「サウザー達の報告でクウラはくらりとする頭を抑える、山等の自然に加え太陽まで顔があるというのはどういう事だ。」

「サウザー達が嘘を言っているなら話はまあわかる、しかしこんなつまらない嘘をつく部下では無い。」

「そもそも勧誘する前なら兎も角、この三人は自分には誠実で確固たる忠誠を誓っている為に真実だと信じるしか無い。」

「住民と接触しましたが、その中でも則巻アラレというアンドロイドの少女はとんでもない存在でした」

「我等の気弾や攻撃をものともせず、拳句の果てには三人まとめてぶっ飛ばされました」

「何？お前達がか？」

「ダメージは此方もそこまで負いませんでしたが、たんこぶが異様に大きくできてぶっ飛ばされたことにも抵抗出来ませんでした」

「ぶっ飛ばされて星になるってああいう事かって実感しましたよ」

「ドローレが見てたギャグ漫画だろ？ありやフィクションでここはノンフィクションだぜ」

「……オレもそのペンギン村という所に向かう、お前達は一度惑星フリーザの幹部連中を始末にいけ。ここに來てから年月がたっている、残党が何を企んでいるか分からんからな」

「はっー」

ここはペンギン村、何処ぞの星のように呆れ返るほど平和な村である。

今日も学校を終えた仲良し組はそれぞれの家に帰って行った。

仲良し組の一人、木緑あかねの実家はCoffeePOTという喫茶店である。

「たでーまー」

「あらおかえり！」

「お？何だ見ない顔がいるじゃねえか」

「そうなのよー！何でも宇宙からきた帝王様なんだって！」

「はー？テイオウサマ？ばっかいつちやつて、そんなんいる訳……」

あかねがカウンターに座る人(?)を見ると、明らかにギャグ漫画の世界の人では無いエイリアンがいた。

その鋭い眼差しと今まで感じたことの無い雰囲気纏い、ピツシリと黒いスーツを着こなしたエイリアンに腰を抜かしかけた。

「ほ、本当にテイオウサマ？」

「貴様の事は調べさせてもらったぞ、木緑あかね。何でもあのロボ娘と仲がいいとか……」

「そうそう、アラレちゃんと会いたいみたいなの！千兵衛さんちに連れてってあげて」

「こいつ、本当に信用してもいいのか……？」

「大丈夫よ、だってほらこんなにお金くれたし！」

「ばいしゅーされてんじやねえか!!ま、まあそれだけ金があれば新しいバイクも……うっひっひっひ」

意外と利用客が少ない喫茶店に、多額の金を贈ったクウラの作戦はぶっ刺さりである。

「はかせー！ただいまー！」

「おーアラレ、帰ってきたか。今わしは忙しいからがっちゃんズと遊んでなさい」

「ほよ？はかせ何作ってるの？」

「クピポー？」

アラレが家に着くと、千兵衛が何やら作っていた。

何やらメカメカしいスーツの様なものだった。

質問された千兵衛は普段のゴリラ顔から、二枚目の渋いイケオジの顔になって得意げに話し出した。

「これか？これはだな……パワードスーツ!!これを着ることでとんでもないパワーを手に入れ、なんと空も海も果てには宇宙にも行けるスーパーな発明なのだー!!」

「ギャハハハー！」

「プピポー！」

「聞かんかー!!!」

ほんの数秒でアラレ達は発明に目もくれず、追いかけて始めていて千兵衛は思いつきり叫んだ。

まるでゴリラのバケモノである。

「はあ……はあ……」

「あはははは！はかせ変な顔〜！」

「クピピポー！」

「誰のせいなんだ誰の……」

ピンポーン

「ん？誰か来たな、どなた〜ってあかねか。後ろの方は……？」

「あかねちゃんだー！」

「よっ、実はこの人が博士達に会いたくて来た帝王様だよ」

「て、帝王!？」

「アンタ誰？」

「オレの名はクウラ、初めましてだな。則巻千兵衛と、則巻アラレ。今回はお前達に話があつて来た」

アラレの秘密を暴け

「ビックゲテスター、解析出来たか？」

《はい、アンドロイド則巻アラレの解析は終了しました。メタルクウラを100%とした場合、強度30%、機動力20%、思考力10%、攻撃性能40%、特殊技能15%となります》

「……映像を踏まえてどう考察する」

《はい、マスターと則巻アラレの戦闘を解析した結果ですね。結論から言えば理解不能です、マスターの攻撃を受けても尚故障せず、攻撃面も性能から見て地球が真つ二つに割れるのは有り得ません。レーザービーム「んちゃ砲」の威力も相当のもので、天津飯のどどん波と大差ない結果です。蛇足ですが地球が真つ二つに割れたのにも関わらず、地球に変化が無いというのも不可解です》

「太陽にも何故か顔があったな、直視していても眩しくはなかったのも普通では無い」

《それからペンギン村にて観測された住民ですが、ガメラ、ゴジラ、ウルトラマン、バルタンといった者達も普通ではありません。特にゴジラはその気になればいとも容易く地球を破壊しうる力を持っています》

「何故そう動かんのだ？」

《単純にアホになってるからです》

「……………そうか」

クウラはビックゲテスターから得られた情報に、思わず頭を抱えそうになる。

あの後アラレと戦う事になったが、引き分けとした。

続けていたら己の何かが変わりそうだと思ったからだ、絶対ろくな事にならない。

《マスター、科学的な推測でなくりますが仮説を聞きますか？》

「頼む」

《結論から言います、恐らくペンギン村はギャグ漫画の世界と思われ

ます》

「ギャグ漫画だど？」

《はい、過去のフリーザ軍戦闘記録から似たような事例がありました。フリーザもギャグ漫画の人物と戦った事があるようです》

「フリーザもか。いや待てよ、確か珍しく奴が連絡を入れてきた時に……」

「兄さん、もし地球に行くのであればお気をつけて。この私が本気を出してもケロツとしている者がいますよ」

「は？」

「名前をリョーツカンキチ、ギャグ漫画のキャラクターらしくてですね……」

「リョーツカンキチ……」

《はい、フリーザの第一形態とはいえ多数のエネルギー弾を食らっても軽傷。次のコマに移った時には傷すらも無くなり、どこからともなくロケットランチャーという兵器を取り出しました》

「そういう能力者として見た方が自然だが、頭が痛くなるな」

《住む世界が文字通り違うのでしよう》

「ハア、もういい。引き続きメタルクウラの強化を急げ、それから二人の人造人間の製造はどうなっている」

《博士から送られている報告では、素体の強化及びゲテスターコアの融合に着手しているとの事です》

「そうか、つくづく思うが……あのレベルの科学者がいて良くもまあ悪という欲を出さないものだ。ブルマの性格上分からなくもないが、あの博士はまだ子供……であれば無意識にそういう物に憧れても当然ともいえる」

《そうですね、食べちゃいたいくらいですわ》

「おい、漏れているぞ」

《すみませんマスター》

<戦闘記録―クウラVSアラレ―>

「きえいー」

クウラは先制としてアラレに拳を叩きつけ、吹き飛ばす。

アラレは為す術なく吹っ飛び、遙か彼方に消えていく。

その様子に少し困惑の表情を見せたクウラに、背後からアラレが飛んできてそのまま衝突。

それを受け止めたはずのクウラが、何故か頭から地面にめり込む。

「きやははー」

「ぐ、何故こうも簡単に……いー」

即座に体勢を立て直すクウラ、全力の悟空やベジータの攻撃であればまだ納得出来る。

しかしダメージもなければ大した攻撃でもなかった、なのにどういう事なのかと理解が追いつかない。

「ハアッー」

クウラが顔面に蹴りを放つ、頭は軽く飛びアラレはフラフラと揺れる。

「成程、アンドロイド故の頭部着脱式か」

「あんたつおいねー」

「貴様もな、やりづらい事この上の無い」

アラレが頭部をつけ直し、独特な走りから頭突きをしてくる。

今度はしっかりと受け止め、カウンターに地面に叩きつけたが手加減しているとはいえヒビひとつ入らない。

「ぬう、ここまで頑丈なのか……いー」

「ア、アラレー！」

千兵衛がアラレを心配する声をあげるが、アラレがホイッと声を発しながら飛んで立ち上がる。

「わくわく！わくわく！」

「戦う事が好きなのか？」

「うん！戦いごっこ大好きだよー！」

アラレにとって、まだこれはごっこの内。

かつてドクターマシリトと戦った、生死をかけた戦いでは無いからだろう。そして全力で遊んでもやられないクウラの強さに、わくわくが止まらない。

「いっくよー!」

「……こいー!」

「すうー……っ!」

たっぷりと空気を吸い込むアラレ、それを警戒しクウラは構える。ピタツと止まったアラレは、一気に放出した。

「んちゃー……っ!!!」

「むっ!」

放たれたエネルギー波、んちゃ砲は真っ直ぐとクウラに向かっている。

クウラは掌をかざし、んちゃ砲を受け止めた……が。

「……」

真っ黒焦げである、それはもう見事なギャグ漫画的真っ黒焦げである。

まるでアラレに手榴弾を口に入れられた千兵衛の様な、黒焦げだった。

「……中々の威力だが、それでもその程度だな」

カツコつけるしかなかった、そしてクウラは体の変化を感じ取った。

まるで鍛えてきた身体がなかったことになる様な感覚、それから何とも言えない違和感が確かにクウラにあった。

「ここまでにしよう、続きはまた今度だ」

「ほよ? わかった! 楽しかったよ、クウラおじさん!」

「お兄さんだ」

こうして結果は引き分け、いやクウラにとっては逃走となるのかもしれない。

だが今までの己がナニカに変わっていきそうな事には変わりなく、引き返して正解だったのだ。

これがアラレと戦った弊害なのか、それともペンギン村に関わって

しまったからなのかは分からない。

アラレと闘うには適正が必要なかもしれない、そうギャグ適正と
いうものが。

例えばギニュー特戦隊であればもしかしたら……